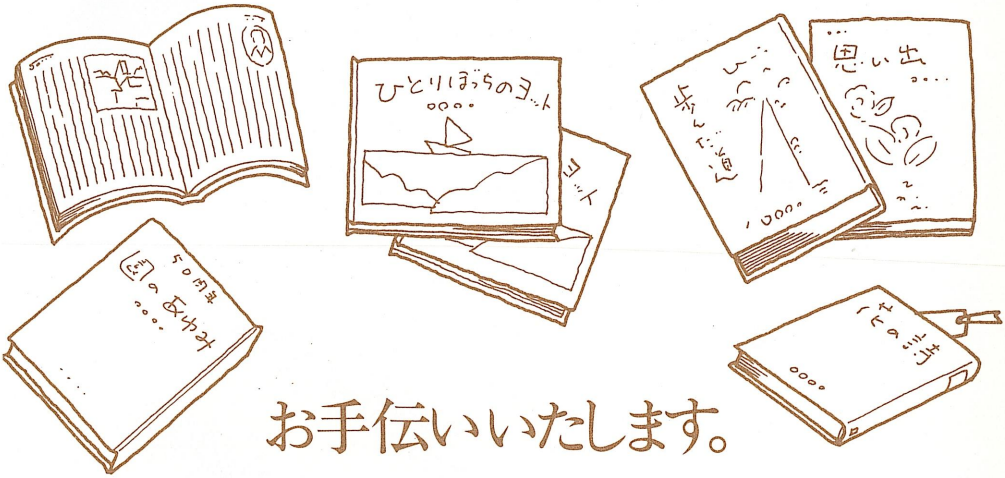
家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

2

第八十四巻　第二号　日本幼稚園協会

記念の本づくりを
自費出版
なさいませんか。



お手伝いいたします。

- 内容、装幀、部数など思いどおりになる自費出版。手間のかかる編集作業は、キンダーブックや優良保育図書、雑誌などを手がけてきたプロの編集者がすべてお手伝いいたします。
- お気軽にご相談ください。
- 完成したご本については、小社の宣伝ルートを通して全国にご紹介いたします。

1．**本の内容は……** 自叙伝、童話集、絵本、園の記念誌、研究集録、随想集、作品集など、ご随意に。

2．**製作部数は……** 1,000部以上がお得ですが少部数でもお受け致します。

3．**製作期間は……** 原稿頂戴から完成まで、約3か月見てください。

4．**本の大きさや体裁は……** 大きさはB6判、B5判、A5判など。製本は、上製本から並製本カバーつきまで各種あります。お好みのままに。また表紙などはご希望のセンスを尊重してご相談に応じます。

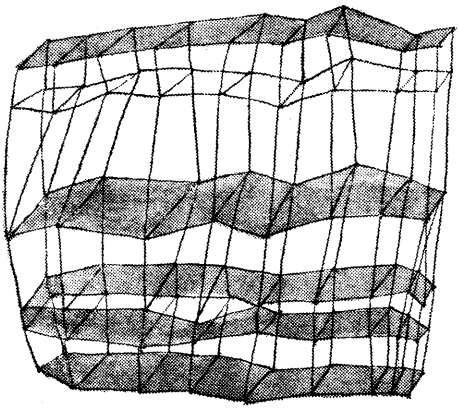
5．**本文は……** 原稿用紙に書かれたものでも、テープに吹きこまれたものでも、結構です。綺麗でわかりやすい組み方にいたします。

6．**絵や写真は……** もちろん結構です。カラーのご相談にも応じます。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
ブレーベル館 記念の本づくり係 〒101 東京都千代田区神田小川町3-1
TEL 03－292－7788

（ご連絡はお近くの小社代理店・事業所にどうぞ。）

幼児の教育



第八十四巻　第二号

幼児の教育　目次

——第八十四巻　二月号——

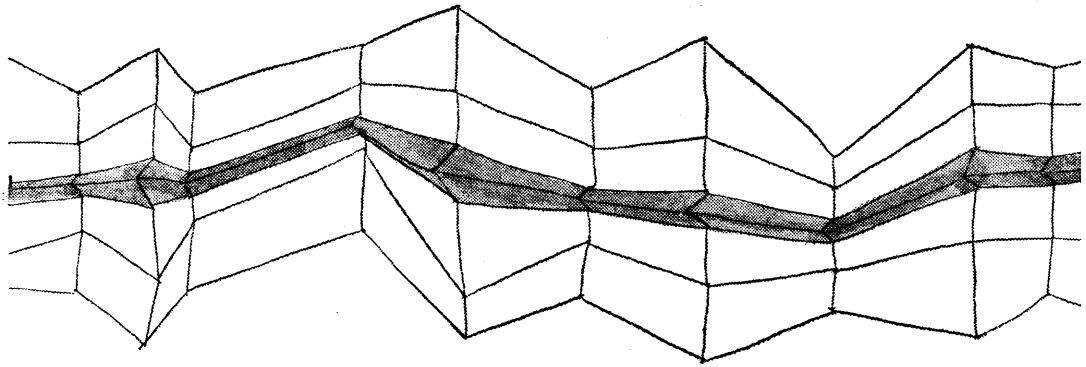
視線の過剰……森　毅…(4)

寺子屋の子ども達
——いのちへの慈しみと躾——……小池正胤…(6)

兎園随筆⑥
——久ちゃん——……蕪木寿江…(16)

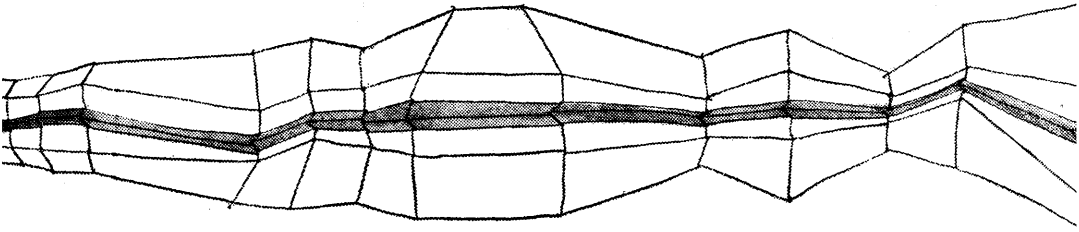
SF的読み解き
子どもという風景(2)……堀内　守…(20)

© 1985
日本幼稚園協会

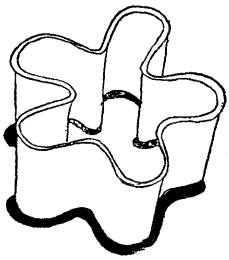


養護学校の日々
開けゆく未来……津守　真…(30)
☆図書紹介
『保育の見直し』……江波諄子…(36)
ブリューゲルの「子供の遊戯」(最終回)
——西洋美術史にみられる〝子供の遊戯〟小史——
……森　洋子…(38)

表紙絵・『ヨーロッパのきりがみと影絵』(岩崎美術社刊)より
カット・福田　理恵



視線の過剰



森　毅

子どもという概念が確立してきたのは、おとながそれを視ることによってではなかろうか。いま、子どもは視線の過剰にさらされているような気がする。

いまでは、おとなの側が、子どもに目をとどかせることが強制されている。それは、一見は子どもを保護する暖かい視線と錯覚されているが、当の子どもにしてみれば、いつも監視されている冷たい視線と取らないでもない。いつも視られているなんて、うっとうしい話だ。

たしかに、ときに子どもの姿を眺めるのは、昔から娯しいものだった。しかし、そうした場合は、見ているのは子どものいる風景であって、彼らの行動を凝視するわけではない。子どもにしてみても、眺められる風景のなかに位置をしめるだけなら、そう気が重くもなるまいし、むしろ、存在の場の安定にもつながろう。

古今東西を通じて、視と見の二種類があって、視のほうでは目的意識的に注視するごとく、見は場を眺めているだけのような気分がある。しかも、知の

意がこめられるのは、いつでも見の側である。聴と聞についても、同様のことが言える。おそらく、目的意識的な行為はその限定のゆえに知につながらず、場の存在の一部であることだけが、知をもたらすのであろうか。

知の場としての学校とか幼稚園で、教育とか保育とか言うなら、その場をよき風景にすることだろう。教師や保母は、その風景のなかにあって、子どもから見られる存在であればよい。ところが、現実にはその反対に、職業的な視線が要求されかねない。子どもに目をとどかせることが、よき教師とされるのだが、それは子どもの側からすると、みずからを監視される側におくことになってしまう。こうして、過剰な視線にさらされる存在として、現代の子どもが作られる。

もちろん、子どもが自分を見せびらかしたがるのは、よく知られたことだ。しかしそれは、この自分のいる風景のパフォーマンスを眺められることだろう。ときに森のなかで、観客のいない舞台において、子どもは自分を見せびらかす。眺められる存在になることが問題なのであって、それは凝視されることではない。

学校で、おそらくは幼稚園でも、いま要求されているほどには、教師は子どもに目をとどかせる必要はないのではなかろうか。ぼんやりと眺めている、そして、彼らが教師の側をどう見ているかを、ひそかに気にしている、そうした姿のほうが、ぼくには好ましい。

学校とか幼稚園とかに制度化されるということは、目的意識的な機能を肥大化させることでもあり、いくらかはそれは仕方がないことでもあるのだが、それでもなお、それをただの〈子どものいる風景〉とする視座を残しておきたい気がするのだ。

（京都大学）

寺子屋のこども達

――いのちへの慈しみと躾――

小池正胤

まず一枚の絵を見てみよう。これは安永九年（一七八〇）に出された下河辺拾水画『絵本子供風俗弄』の最初の挿絵である。閻魔の絵像に向って七八才前後の子供が指さし、女は背に幼児を負いながら奉捨の精米を差出している。小児の衣裳に描き分けられた紋様は当時の風俗をしのばせ、肩あげの糸めまで書かれてほほえましい。戯れている犬ころの顔ものどかな京都市中の一点景である。

閻魔はその恐ろしげな顔に似合わず、子供たちの守護神のひとりであった。「伊勢稿のうちは閻魔を尊とがり」の川柳があるように、正月と盆の藪入りには各地の閻魔堂は参詣の子供たちで賑わったし、ここではいたずら盛りの子供たちに「幼童衆久しうお目に掛らぬ。嘸無理わやく（いたずら）でござらふ。無理いふと塩付て天窓からがりがりと噛ぞよ」と親しく語りかけている。

この本はこうして絵を挿みながら閻魔が子供にかたりかける口調で文を進めていく。

あるとあらゆる物の中にて、人ほど尊ものはなけれど、悪ふ習と禽獣にも劣といふ事、必うかゝと聞まいぞ。犬や猫の子を見るに、親の乳を放るゝと、はや親の世話いらず

▲下河辺拾水 画 『絵本子供風俗弄』

に面々我身で我身を持。鳥類とても同じ事、巣立の後は、親の世話に預からずそれ〴〵に我身を養ふ。人の子は産れてから、親の膝を放れて後も唯仮初で人には得ならぬ。喰ふも飲もきるも食も寝も起も痘瘡はしかはいふに及ばず。寒いに付暑に付、親の苦労を放るゝ間は暫もない。

このように親の子育ての苦労を説きながら、成長していく間の子供の心得をやさしく語り続ける。絵には五月の節句人形を見ながら遊ぶ子供や寺子屋で子供がいたずらや喧嘩をする有様が描かれる。とくに寺子屋の図は後に記すところとも関連があるので掲げてみた。女性も世間では「内心如夜叉」というが閻魔はいう。

生れ付の内心が夜叉のごとしといふではない。人々生れ付の本心といふものは男女の差別なく、貴賤賢愚の高下も無。唯一個の御神体。

この二つの文の趣旨で注意されるのは、人間を霊長類と認めながらも動物の子もそれなりに認めていること、また貴賤高下男女を問わずその心は同じである、ということだろう。この二つはとくに近世町人の子供に対した人に対した態度を支える思想でもあった。

ついでにいえばこういう絵本類は今日でも多く残っている。さらに子供を対象をした往来物や草双紙類も多い。だが今日まで、これらの内容を研究の対象として取りあげられることはあまりなかった。以下江戸中期から後期の子供の教育についていくつかの資料から考えてみる。それらは今日の教育の理念や方法とかなり異るところはある。しかしそれ故に現代が忘れがちな教育の原像を示唆するのではないかと思う。

『絵入かな付近道子宝』（別名「童子智恵袋」）がある。これは絵本ではなく往来物とよばれるが、初版正徳三年（一七一三）、再版文政元年（一八一八）、三版弘化四年（一八四八）、四版安政四年（一八五七）と重ねられた。近世中期から幕末まで長く読まれていたので、読者も相当な数になったと思われる。上段に挿絵が入り、朝夕に天を拝する所、春・夏・秋・冬、十二支、峯・滝・島、などが描かれ、下四分の三程に文章が書かれている。

童部の時早く習ひしるべき事あり。先上を天と云、下を地と云。月日の出る方を東と云、月日の入方を西と云。東に向ひ右の方を南と云、左の方を北と云也。

実に簡潔的確な示し方である。続いて季節十干十二支、山河海陸、誕生から生長する折々の儀式、寺子屋入りから読書・習字、衣・食・住、武器、大工道具、諸職人、商人の算用と秤、諸芸遊戯の数々が上欄の絵と対になって示される。職人の種類は三十五種にのぼり、算用は「十匁に買置たる物は拾一匁に売れば壱匁の利也、是を一割の利と云」とわかりやすい。いはば、前書と異り実利の書で、また往来物共通の型式を踏んでいるが、終り近くには次のような文章が入っている。

右武士百姓細工人商人を士農工商の四民と云、国土を相持にする者なり。

士農工商それぞれが国土を支えている、というのである。それは初にあげた「貴賤上下の別なく」の考え方にも通ずる。次に東西南北の方角から始り、寺子屋の様子を描き、子供の生活に身近かな諸職人や商人の子として必須の知識をあげて最後にこの言葉に至るとき、読者の

子供たちは、自分たちとその家庭の社会での位置と意味と心得をそれなりに悟ったにちがいない。

往来物は子供たちが主として寺子屋で使う教科書であった。まだその使い方はいずれの教科書でも必ず音読し、同時に習字の手本ともして書きながら覚えていった。このことについてはすでに述べたことがあるので（『「読み」の寺子屋教育―読み方の原点―』「児童心理」昭58・12）ここでは略すが、寺子屋では音読とともに書くのを繰り返していた。それが本書のような内容であった。そこで『子供風俗弄』にも描かれた寺子屋と子供たちを草双紙類によって見てみたい。

宝暦十二年（一七六七）刊の黒本に『寺子短歌』という一書がある。黒本とは一七三〇年頃から八〇年頃まで江戸で刊行されたこれこそ子供向きの絵本で、この四、五〇年に二千種近くが出版された。いわば当時のかくれたベストセラーであった。

この本ははじめ鱗形屋（江戸最古の書店の一）から、後に西村屋から表紙をつけかえて再版されているのでやはり相当に読まれたものと思う。

体裁は前二書よりやや小さく、紙面の上四分の一に文字、下に絵が入る。初丁の一場面。

㋑　いろはから学びおぼゆる手本かず

㋺　ろんごもうじにあるごとく師匠の御おん親のおん

絵は師匠に向って寺子屋入りの挨拶をする子供。続いて次の場面。

㋩　はつ午ごとの寺のぼり　まひ年ふえる子供たち

㋥　にん形ばかり書きたがり　さうしにそつと水をかけ

絵は一転して『子供風俗弄』の寺子屋の場と同じような図柄が続く。机の上に座らせられて罰をうける子、その下で手習いしている子供、師匠は黒い肩当てのついた羽織で手には弓杖らしいものを半分にして持っている。子供のいたずらを見た師匠は「おのれらはるすにさへなればしばゐをやりをる、きやう一日とめるぞかくごせい」という。これがその場の様子をより面白くさせてい

▲下河辺拾水 画 『絵本子供風俗弄』

る。そのほか子供に手を持ちそえて字を習わせたり、読み方・算盤を教える図もある。

子供や親の心得、女子の様子を描いた場面。

㋭ ねたりことして二親についえな銭をつかはすな

㋖ きりようある子は女ども八分字篆字を書もあり

㋬ ゆるかせにする母もあり きびしい父が薬ぞや

八分字とは隷書の一種、女子でもここまで書く子がいた。またいたずら坊主に怒って帚木を逆手に家から追い出そうとする父、とめる母、これを見て「松二郎さんおらがうちへにげてきな」とかばう友だちなど、さながら現代の家庭の一駒を思わせる場面もあってまた面白い。

この黒本は僅か十丁二十頁の小冊で、前二書より粗末な仕立てであるが、やはり前二書に通ずるものがあるところを見る。それは絵に武士の子弟（小脇差を傍にし、袖もたもとが長く、髪の結い様も町人の子とは異る）と町人の子供が一緒に学習しているのが描かれること、また、同じ師匠が女子にも教え、親の様子が絵文ともに描かれていること、などである。この時期すでに江戸では

一部の武士の子供と町人が机を並べて学習していた。（これについてもすでに述べたことがある。「だめ息子の読書―近世儒者の少年期―」『本』昭57・10）『近道子宝』のような教科書を手に学ぶ子供たちは『子供風俗弄』の京都でも、また『寺子短歌』の江戸でもこのようにして寺子屋に通い、そのうしろにはそれぞれの親たちがまた子供の日常に一喜一憂していたのであった。

これら子供たちの一人を追った作品に十返舎一九作画黄表紙『初登山手習方帖』寛政八年（一七九六）刊があった。

主人公長松は寺子屋でも名うてのなまけ者いたずら者でとうとう寺子屋から引取ってくれといわれてしまった。最初の絵は手習草子（習字練習帖）を前に怒る父とこれをなだめる母、足を投げ出して泣く子の背中の壁には天神を描いた軸が下がっている場面である。次に家で習字を始めるが机に伏して居眠る子とこれを茫然と口に袖を当てて見守る母が描かれる。

この子の夢中に天神様が出て来た。天神様は長松に菓子や天ぷらがふんだんにたべられる所、さまざまなおもちゃのある所などを連れ歩き、したい放題のことをさせた後に、もっと面白い所があるがその前に二、三日字を習えと「一日学三百六十字」と書いた手本を与えた。長松がこれを習うと天神は長松を肩車にして、多くの子供たちが「初登山」をしている所に連れていった。「初登山」とは子供がはじめて寺入りをして学ぶことをいう。子供たちは机や筆を背負い身に手習草子を鎧のようにつけて山を登って行く。この場面も『風俗弄』や『寺子短歌』に通ずる。子供たちは長松を誘う。つられて長松は「コレおめえたちや、おいらも仲間へ入れてくんな、拝みの後生だ」と頼む。やがて長松は天神の前で立派に字を書いた。夢からさめた長松は親の気持も知り精出すようになった。画面の左上には去って行く天神の姿が吹き出しで小さく描かれる。

単純な内容だが、『寺子短歌』をやや小説風に仕組んだ当時の〝落ちこぼれ物語〟ともいえよう。もちろん当

時とてもこの様に簡単に「落ちこぼれ」が直ったとは思えない。ただそれがこのような黄表紙に仕立てられたのは、このような問題が町人の間に広くあり、それが読者にも共感を与えたのであろう。またそこに作者十返舎一九自身が住む町人社会の親子たちへの深い関心と同情があったことも窺えるのである。

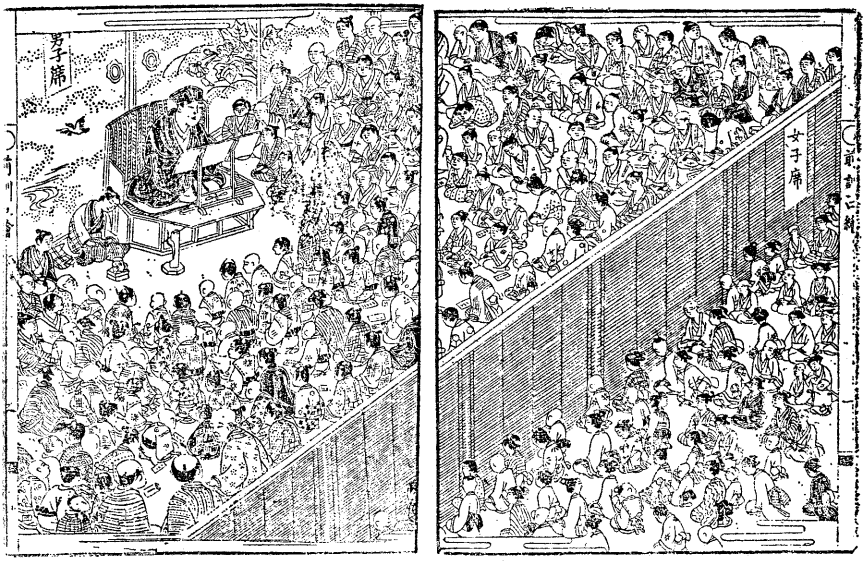
さて、こういった町人の子供たちの生活と親の気持の根底を支えていたものを改めて考えてみたい。

その例として有名な心学者の手島堵庵（一七一八―一七八六）の『前訓』と、やや遅れて世に出た農政学者大蔵永常（一七六八―一八六〇）の『民家養草』をあげる。前者は石川謙氏の『石門心学史の研究』や柴田実氏の『石門心学』解説（「日本思想大系」）に詳しく、後者は筑波常治氏の『大蔵永常』（「筑波常治伝記物語全集」）があるので解説その他はそれらに譲り、ここでは両書中の特に印象的な数文を引用する。

『男子女子前訓』は安永二年（一七七三）初版・安永七年再版、寛政四年（一七九二）三板、と重ねており、今迄の諸書のように、多くの読者をもっていた。

架蔵本は三版であるが、その扉には「前訓と申ハ御男子七才より十五歳まで御女子七才より十二歳まで右の年に相応の御をしへを手嶋先生御講尺にて御幼稚様方御行作よろしく御成り候ための御をしへに御座候間無縁の御かたも御望の御かた御小児様方御遠慮なく御遣し可被遊候」とあり、次丁と次の見開きには、この講釈に集る子供たちが男女それぞれの席で聴講する様子が描かれる。次に本文となるがその一例に「殺生をする事ハ甚あしき事にて候」がある。堵庵はここで殺生とは「定まりたる料理ごと、あるひは薬ぐひなどに魚鳥の命をとり候事にてはなく候」と断わり、「かりそめの弄びにも生類をかひてはつなぎくるしめ又たといかはず候とても犬を打擲走らかし鶏鳩鼠などをとらへ苦しめ、虫けらの頭をとり。羽をぬき。」等々の類つまり無益の殺生をすることだという。それらを禁ずるのは何故か、堵庵は続けていう。

一切萬物はみなもと直に我が身なり。草木虫魚鳥獣生ある



▲手島堵庵 著 『前訓』扉絵

ものは猶以て我が身にとりて近く重し。然れどもそれをいためて覚へぬは今の身にても我が髪のはし爪のはしは我身の内なれどもおぼへぬに同じ。しかればさしあたりいたみは覚へねども我が身のはしに違ひはなし。夫を毀傷いため殺すは我が身をやぶるに似たれば、深重の罪科なり。現在の我が身の命ををしくいたみのいたさこたへにくさにて引くらべおもひしりて左様の事かたくなさるまじく候。これも偽と同じ事にて幼少より殺生をいたしつけ候へば後にはものをころすこと上手になり甚いやらしくおそろしきものになり申ものにて候。

この一文は奇しくも『子供風俗弄』と通ずる。いわば絶対的な生きとし生ける者の尊厳を認めることであり、同時にそれは人命の尊厳にも通ずるものといえよう。かといって堵庵はそれを仏教的な殺生因果律で説いたのではなかった。人間が生きるために他の生物を殺すことを認めながら、同時に人間の生も動物の生も同じ価値のあることを説いたのであった。それは少し拡大解釈するならば人間生活への心からのいつくしみであり、それが特に幼児・児童に向って説かれたところに意味があった。

これは同時に彼らの父母・祖父母へ向っても説かれたことになる。

もちろん『前訓』のなかでも女子に向って「三従の道」を説く部分などは明らかに幕藩体制下（あえて封建体制とはいわない）の家中心の思想から出ているのであり、それらをすべて含めて肯定的に評価しようというのではない。ただし成人男子に対してはたとえば『家内用心集』頓宮咲月書享保十五年（一七三〇）の類のように厳しい実践的義務が要求されていた。堵庵はまた子供たちに親を敬うように訓しながらも此席にも「定而（さだめて）御両親ともなき御子達もあるべし」と細かい配慮をし、その心得を説いている。これもまた裏返せば両親のない子供への気くばりを教えている、ということになろう。

大蔵永常の『民家養草』は以上の諸書よりもやや遅れ、文政十年（一八二七）に刊行された。題名のとおり育児家庭経営の実践倫理を説いたものであった。その上巻七丁オモテには若い父が若い母に乳児を背負わせようとしているまことにほほえましい絵がまず入る。見方によってはこれは背負わせるというより母の背にたわむれる子供に父が笑いながら手をかしてやっているともいえよう。江戸中期の若い夫婦もまたこのような楽しい一刻を過したであろうことが彷彿とさせられる構図である。ところで文は次のようにいう。

すべて小児の三四歳ぐらゐのころはよに愛らしきものにめでて、ねぶりまわし頬ずりしてなでさすり歌ひくるひ或は人にほこる。是は子に淫するとて恥を知ぬと善人は申置給へり。ケ様の事も親たるもの慎べき事也。親は其親の跡を嗣（つぐ）。子は我跡を譲るものなれば随分きびしく育るこそ慈悲とは云べけれ。

これは一見厳格な躾教育をすでに幼児期に要求しているように読まれる。しかし、挿絵と対応する最初の文は、幼児の愛らしさを全面的に認めての謂である。つまり愛らしさのみをそのまま盲目的に追ってはならぬことを戒しめているのである。さらに下巻の10丁では母親が子供を寝かしつけている図が入る。鉢を剃ったやっこ頭の子の首元まで布団をかけた寝姿に見入っている眉を落

した若い母の細い顔はこれまた前図に対照する心温たまる場面である。しかし文は以下のように記す。

人の子としては母を慕ふ事格別に深きもの也。夫ゆゑ母の親の子を思ふ事はいふも更なり。其子成長してたとひ少々不孝にてもけふやよきものにならん、明日や心つかん、また何をいふても年わかきゆゑわやくに見ゆれどもよそにはまだまだ是にくらぶればひやくばいも手にあまり年もまだはるかにかさねたる子の悪敷に競ればくらぶ何ぞ見すてべき程にもなし、只悪敷心のひがまざる為とて其子の心の満足するやうに衣服万端時のはやりくるものを拵へ悦せ機嫌よきを見ては我を忘れてよろこび、又孝行なる子にはもとより水に劣らぬやうに時々のものをこしらへあたへて余念なく思ふ母の心いとあはれにいたはしく（後略）

ここでも永常は子供への愛に溺れずに早くからの厳しい躾を説く。だが世の常の母は永常の云うとおりであろう。とくに「けふやよきものにならん、明日は心つかん」云々は母親の情をまさに云いえていると思う。この人間の常の有様に対する観察の細かさ洞察の鋭さは豊後日田の貧農に生を享け（祖父の代までは豪農であったが）寺子屋へ通ったのみで青年期故郷を出、各地を廻り江戸と大阪を往復しつつやがて一代の農政学者となり、晩年には各藩に招聘されることも多かった永常の人間観察の結果でもあった。永常の生地日田はやがて全国から門弟三千人が蝟集したといわれる大詩人広瀬淡窓・旭荘兄弟を生んだ地でもある。

僅かな数例をもって江戸中期以降の幼少児教育の実態をいうことは当然附会の誹を受けるかもしれない。ただ一般的に今日でも江戸期の教育は封建的な儒教主義を核とする保守的な没個性の強制教育とみなされがちであり、真の教育は維新近代の教育をもって始まるとのみ考えられているのではないだろうか。たしかにそれらを完全に誤解といいきることはできないかも知れない。ただ、いままで掲げてきた数例に描かれた子供たちと彼らへの教えは、ただ親のため家のためのみの倫理を一方的に強制された姿であっただろうか。これらの背後にはそれに類する未検討の数多くの資料が用意されて再評価を待っていることは確かである。

（東京学芸大学）

久ちゃん

蕪木寿江

私の最初の先生、久ちゃんも今年で二十一才になる。一月十一日のお誕生日に間に合うようにカードを求め、雪のハンブルグに送る。

五才の十二月にカルホルニャから帰国、翌一月にお姉さんを入園させて欲しいと見えた双子の久ちゃんも一緒についてきて帰らないので、双子のこととて不憫に思い様子を見ることにした。四才で罹ったホンコン風邪のビールスによる後遺症で脳障害をおこし、お母さんの顔もわからず、しゃべらず排泄の習慣も〇才に逆戻りと、すべて〇才からやりなおした。歩くことはできるが、二年たっても二才になれない部分が多かった。顔色は悪かったが背丈はお姉さんより幾分高く、可愛く明かるい性格で、一定の友達を好きになるわけではないが誰の中にも入っていき、初めから人間がこわくはないことが救いだった。

三学期の転園者ということで、クラスの子ども達の方も余裕を持って接し、その日から仲間として遊んだ。わらべうたの輪の中に見かけたり、手をつないで鬼ごっこをしたり、あや取りの毛糸を指にかけてあげるなど、私の不安をよそに久ちゃんを入れた生活が自然にはじまっ

た。とある日、久ちゃんの姿が見えず大さわぎになって、車や自転車で探すと、家の方に向って歩いている姿を見つけた。近辺は開拓中の処が多くダンプの烈しい道でもあり、思わず怒ってしまったが、本人にはあまり通じなかったようだ。

幼稚園をおことわりするにも近くに住んでいることだし、お姉さんについて来るし、第一、日に日に可愛さが増し、喜んで通園してくるのを、とてもことわるわけには行かず、さりとて生命に関することでもあり、門からでた道の所にお母さんに居ていただくことにした。寒い日も、ネッカチーフをかぶって電柱にもたれて本を読んでいた姿が今でも浮ぶ。今から思うと慙愧の念にかられる。危険防止と共に、お母さんが傍にいると寄りかかり、何もしないでおんぶをせがむので、なんとか自立させたいと園の外で立っていたのでしょうが……。こわいことである。お母さんにやって貰いたかったら、傍にいてもらうことがむしろ自立への近道であるのに、不勉強とはよかれと思ってこういうあやまちを犯す者である。

お姉さんは四月から入学し、久ちゃんは又私のクラスに残った。園側としても安全を期してやめさせた方がいいのではないかとの意見があったが、本人は屈託なくいつもニコニコして登園する。その姿にそれも言えずにいた。家に帰っても久ちゃんのことが真先きに浮び、それからクラスの子どものことを思いだす毎日だった。ご飯をよそう瞬間も、床についてからも久ちゃんがふっとでてくる。これでいいのかな、あとの三十九名に申しわけがないのではないか、毎年お茶の水女子大学で行なわれる夏季講習会の折に、受付けの近くにいらっしゃった附属幼稚園の堀合先生におそるおそる伺った。「久ちゃんのことがいつも頭から離れずこれで教育者としてよいのでしょうか」と思い切って聞くと、私の肩をポンとたたかれて「あなた良いことをなさっていらっしゃるのよ、頑張って下さいね」と言われた。心臓がドキドキして御礼もそこそこに席に着くと、一度に涙がこみあげてきた。

その十月のはじめに、夕方お母さんとお使いに行って一足先きに帰った筈の久ちゃんがいなくなった。すぐ目と鼻の先だったので大丈夫と思ったのだろうが見あたらず、遂に夜の七時の有線放送で「六才の女の子が迷子になって見つかりません。市が尾幼稚園の制服を着ていま

す」と流れた。小さな農村地帯ですし、「制服」と言うところでいろいろと迷惑をおかけした。懐中電灯を持って大声で叫びながら手わけをして探した。間もなく二四六号線の交差点で信号待ちをしていた運転手さんが見つけて知らせてくれた。道路わきの芒の中に蹲んでいた。家のすぐ近くにいたのだ。抱きしめては泣いて久ちゃんを怒った。久ちゃんは小さい声で覚えたての「ごめんなさい」を繰り返していた。口だけが無表情に動いた。

月に一度は発作におそわれ、何秒かは意識不明になり痙攣を伴なった。大学病院で二週間単位の投薬を受け、ときには興奮状態で走りまわりつまずいて転んだり、せっかく高く積みあげた積木にぶつかってこわしたりした。「だれだー」とふだんからけんかっぱやい男の子がどなっても、久ちゃんだとわかると「いいんだよ」とふりむいて声をかけ、又ある時は机に臥したまま眠る日もあり、その度にまわりの友達が自分の遊び着をぬいで久ちゃんの背中にかけ、何枚ものやさしさの布団に包まれて眠ることもあった。

一月のお誕生会では指に水色のリボンをつけて「仲良し蝶」のリズム劇の雨になった。久ちゃんの動きに合わせて雨達が踊った。三月のお雛祭り会では、終りの言葉を覚えてマイクで話した。久ちゃんが上手に言えると友達が拍手してよろこび、その度に久ちゃんもよろこび、久ちゃんがよろこぶと又友達がよろこんだ。久ちゃんに学びながら次第に先生方のアイドルになっていった。

四月からは遠くの特殊学級に行った。一年から六年までの七人のクラスで五十代のよさそうな男の先生が受け持っていた。休日を利用しては見に行ったが、二度ともジャングルジムのてっぺんにいた。高い処は一番安全な場所なのだろう。一年通って転勤でアメリカへ行った。無学年制で、その子に合った教育がなされ、家では犬を飼い動物好きの久ちゃんがよく世話をすると便りを受けた。十五才でひらがなとかたかなが少しずつ書けるようになり、お母さんの言ったことを一字一字丁寧に書いてきた。

それから現在のハンブルグに移った。卒業間近の学校への送迎は、行きはお母さんがして帰りは久ちゃんの為に、一人の先生と、一人のポリスが隠れるようにしてバスに乗り家まで送って下さり、一人立ちができるようにとの配慮に感謝している、とあった。

最近の手紙には「新学期より今度は男の先生で三人のクラスで勉強しています。今まで習ったことをなお繰り返し毎日実習するそうです。朝食、昼食用の買物からクッキングまで自分達でやる事になり、今までのように朝食のサンドイッチを持たせなくてもよくなりました。マーケットでどんな食品を買っているのか、毎日尋ねるのが楽しみで、久子も一生懸命思い出しながら答えてくれます」

「小さなハンブルグの中に四つもベアクスタットがあり、そこで働く事が決まるまで両親共の面接が二回（三月と五月）ありましたが、一度目は労働局の方が学校に出むかれ、校医と共に健康状態などをチェック、二度目は実際に働くベアクスタットへ我々が出向き面接の上、これからやる初歩の仕事を二、三取り上げ、実際に皆の前で試みたりと、親も子も納得のいく行き届いたやり方ですっかり感服してしまいました。労働局―ベアクスタット―学校とが一体となっているからこそで、日本にもこんなシステムがあれば障害児を持つ親はどんなに安心して毎日を過すことができるでしょう、とつくづく考えてしまいます」

「沢山の職種の中から一番適応した仕事を見つけ喜んで働いてくれればはげみにもなり充分な仕事ですのに、つたない労働力に対しては一ヵ月七千円の賃金を支払って下さるそうですし、終生そこで働けるとのお話でたんにゲストアルバイトとして永住している外国人としての私には夢のような話です」

便箋の終りに、来春には日本への転勤の話もあると書かれてあり、私はすぐに返事を書いた。「成人の障害者を受け入れるところはこの辺にはない。田口恒夫先生が栃木の山奥を開墾して、誰でも、いつでも、何日でも泊るところをと、自給自足をめざして畑を耕やしていらっしゃると伺うが、それも国の力ではなく、学問を探求する人の底に流れる愛情によるもの、もうしばらく日本に帰らない方がいい」と、急いで書いた。

戦前派の祖国を愛する者として、「日本に帰るな」とはなんという悲しいことだ。言語道断――。双子の姉は日本の大学に学んでいるし、親としてはいたばさみの思いだろうが、「日本に帰っていらっしゃい」と言える日は果して来るのだろうか。

（神奈川・市が尾幼稚園）

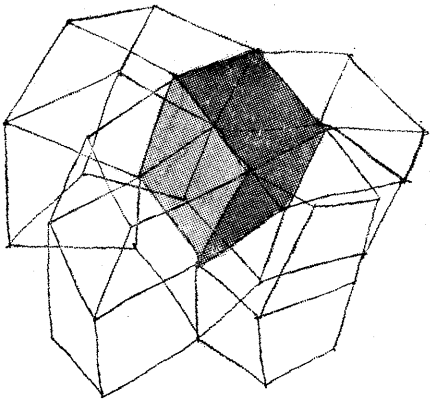
SF的読み解き
子どもという風景
第二回　シンポジウムの楽しさ

堀内　守

シンポ

最近は「シンポジウム」という催しがはやりになっている。テーマも、雰囲気もさまざまだが、以前はかなりいかめしい学会などで行われているにすぎなかった。それがいまではすっかり定着したようだ。同様な形のものに「パネル・ディスカッション」というのがある。どこがどう違うのか、説明せよと言われてもすぐに答えられる人は少なかろう。

前者はいまや「シンポ」と略称され、往時の「進歩」に取って代わる勢いを示しており、後者もますます旺んである。PTA、カルチャー・センター、青年団体、学会、その他もろもろ。特に「二十一世紀の……」と銘うった団体や組織が華々しく催す「シンポ」や「パネル」は宣伝もみごとになった。提案者の顔ぶれも魅力的である。司会者も実にうまくなった。ソツがない。ユーモア



も加味するから笑い声も湧く。

逆の例もある。提案者がヨソ行きのことばで、模範答案などに近い内容をあらかじめ紙に書いてきて棒読みをする場合だ。フロアの人びとは、はじめこそ儀礼的におつき合いをしているが、そのうちに疲れ、あきれて目をつぶり、なかにはスヤスヤと睡魔と仲良しになる方も出てくる。一方、当の問題提起者は早口で読み、早いところ自分の責から逃げ出さんものと汗をかいている。双方の対照の何とみごとなことだろう。

こういう時の司会はつらい。与えられた制限時間はとっくに過ぎ、次の順番の提案者がいらいらしているのも見える。それなのに、棒読みの人は一向に止めるけはいが見られない。のみならず、そういう人に限って、終わりの文句に「はなはだ簡単で失礼ですが」などという一句を附け加える。フロアの人びとは本当は笑いとばしてもいいところだが、儀礼的にパチパチと拍手をする。しかし、その顔には「やれやれ、やっと終わったか」という定堵の表情が見え見えである。

司会の立場はもっと逆説的になる。こういう提案者が続くと、時間は長く感じられるし、フロアの人びとは完全にシラケてしまうから、何とか間をもたせなければならない。しかしながら、そういうまい手は見つからない。

だから、二時間ほどの時が流れると、「はなはだ残念ではありますが、時間が来てしまいまして……」などと、口では残念そうに言いながら、心の中では「やれやれ、やっと助かった」と、うれしそうな表情を見せる。

シュンポジオン

こんな例に何度ぶつかったことだろう。この一年ふりかえっただけでも十回近くがそれであった。「シンポを面白くやる方法」「パネルをシラケさせない方法」などと売りものにして商売をする人が出てもいいと思ったくらい。

さて、場面は飛ぶ。どこへ飛ぶかというと、紀元前四

百十六年のギリシアのアテナイのある街頭である。

ここに哲学者のソクラテスがやってきた。いつものように考えごとをしながら。ただし、彼の考えごとというのは額にしわを寄せたような形のものではなかった。服装はみすぼらしいが、顔の色つやは大変よろしい。のみならず今日ばかりは期待で胸をはずませているようで、足どりも軽い。

実はアテナイの悲劇作家として有名なアガトンが作品コンクールで優勝したのである。ソクラテスはそのお祝いにかけつけるところなのである。これではソクラテスのごきげんもよいはずである。

当時のアテナイにおいては、こういう場合優勝した者が自宅に客を呼び、ごち走をするのが習慣だった。客の方は、特に招かれなくとも、お祝いのことばを言うのを理由にしてごち走にありつくためにやってくる。そして夜を徹し、疲れて眠くなるまで順番に自分の見解をのべる。一つのテーマをめぐって、何時間でもおしゃべりをし、横になって、ごち走を食べ、話に加わったり、眠ってみたり、飲んだり食べたりしたのであった。

当時のソクラテスは五十四歳ぐらい。元気いっぱいだった。弁もたつ。また聴き上手でもあった。

コンクールに優勝したアガトンは邸内を開放したも同じである。つぎつぎに客がやってきてはお祝を言う。そして、ごち走を食べ続けるから、ごち走を絶やさないようにしなければならない。こういう時に、ホストがどのくらい気前がよかったか、それを参加者たちがのちに語り合う。気前がよかったと判定されないと、人物評価が落ちてしまう。そうなっては大事(おおごと)である。いきおい気前よくごち走をふるまわざるをえなかった。

その日集まった者は何について語り合ったか。いいかげん酔っぱらったところで話がしだいに一つのテーマにしぼられていった。それが共通のテーマになる。司会者はいないけれども、語り手は順序よく語り続える。

その日のテーマは「エロス(恋)について」であった。優雅なテーマである。また悩み多きテーマでもあった。また別の面から考えると、答が簡単には出てこないよう

なテーマでもあった。讃歌にもなる。苦しい体験を語ることにもなる。伝説や神話を語ることにもなる。

長々と語り合う参加者たちは、だれも酔っている。酒に酔うとともに、ことばに酔っている。その話が最高潮に達したとき、突然外から別の酔客たちが駆け込んできて、それまでの対話をぶちこわしてしまう。そして、絡みつく。こちらの方は酒だけに酔っているから扱いがむずかしい。ドラマが急にドタバタ劇に変わってしまったようなものである。

ドタバタ劇

さて、以上の光景は、実はプラトンの著した『饗宴（シュンポジオン）—エロスについて』の内容の概観である。プラトンは作者の立場を守って、そのドタバタ劇に登場しない。劇のなかに登場するのは実在した人物たちだが、実在の人物そのままではなさそうである。いいかえると、プラトンはルポルタージュを書いたわけではない。実在の人物をヒントにし、モデルに借りながらこの作品を書いた。

哲学者たちの手にかかると、こういう作品は、急に面倒な地位に押しあげられ、何となくむずかしそうな内容に変身させられ、読み解きができないようならばそれだけ深遠な哲理をのべたものという奇妙なことになりがちである。（そうでない哲学者がおられたら、暴言ゴメンナサイ。またそうでないようなら大らかなまなざしの哲学者がおられたなら、いちど「シュンポジオン」をいっしょにやってみたいものです。）

さて、そこで、右の『シュンポジオン』を哲学の本と見なさずに、まず一つの台本と見なしてみよう。そして、それを——先にも指摘したことだが——ドタバタ劇のように念を入れて眺め直してみてみるのである。

その時、私たちの視線は少なくとも、次の三つの間を揺れ動くはずである。

一、この作品のなかで話題にされてある「エロス」に向かうか。

二、ここに参加してしゃべりまくっている人びとの語

り口や絡み方に向かうか。

三、これに何らかの意図をこめて、劇の展開のしかたに工夫をこらしながらこれを書いているプラントンに向かうか。

さしあたり、この三つの問題を考えてみよう。そうすると、この台本は、ただ単に一つの意味をもったものとして平板に理解されてはならず、いくつもの楽器が各パートを演奏しながら、全体としてはある曲を奏でているというように読めてくる。

ドタバタ劇のようなその展開も、いろいろな意味を乱反射してくる。たとえば、私たちの自分たちの想像力を発揮して、この台本をもとに、どのような劇の場面を再現できるか試みてみることができる。それは、台本の読者としての立場から、演出者ないし観客の立場に移り、そこから実演を生き生きと想像してみることに通じている。さて、そうなると、登場人物の性格づけも当然変わってくる。たとえば、そこに登場するソクラテスの語り口は、重々しく哲理を語るようなキャラクターとすべきなのか、それとも反対に冗談ばかり言って他の登場人物をからかうようなキャラクターとすべきであるのか。

少々劇をやったことのある人なら、この場合どちらの役づけがむずかしいかは容易に見抜けると思う。重々しく哲理を語るような人物を演じる方が容易なのである。むしろ、一見簡単そうな役者の人物設定の方がやりにくいのである。

理由は簡単である。重々しく語るという口調は、一本調子で唱えるように演ずるに近いからである。動きも少ない。これに対し、後者の場合は、一つのセリフのなかにいくつもの意味を繰り込み、観客がその層のいずれからも意味を読みとれるように演じなければならないからである。

意味の重層化

これは意味を幾重にも塗り固めていくのに似ている。そして、もしうまくやることができれば、観客はそこか

らいろいろな意味を読み取り、劇のなかに参入したり、つき放したりしながら自分の独自の世界をつくっていくことができよう。

子どもという風景も、以上のできごとに似た形で形づくられる。

たとえば、ここでプラトンをまねて、仮空の台本を書いてみてもよい。

日常私たちは現実の問題や想像上の問題に当面している。十人が集まれば、まさに「十人十色」の意見をもっている。共通の面を確かめるにはいろいろな手続が必要になり、時間もかかる。学者、芸術家、保母、評論家などの人びとが「シンポ」の提案者になったとしてみよう。各人はなじみのない相手に向かって、どのように問題を投げかけるべきかを想像の上で決断し、自分のシナリオを書いて集まってくる。

そういう時、意見のズレよりも、つまらぬところから起こるルールの違いの方が問題になる。専門家というものは、えてして他の人にはチンプンカンプンな専門語を使って話をしがちである。ご当人はそのことばの特殊性に気づいていない。だから、他の人にはそれだけ余計に憤激を呼び起こすことになる。おそらくこのようなことは、どんな仕事についている人でも薄々は気づいているはずであるが、思考や言語の習慣が強く働き過ぎるものだから、ついそのギャップを忘れてしまうのであろう。

経験的にも確かめられるのは、学者たち同士の場合である。彼らがちょっとした術語の使用法についてとがめ立てをはじめると、話はとんでもないところに移っていく。学者たちはしごくまじめなつもりでいても、まわりの人びとにとってはつまらぬセンサクのように見え、さらに学者とは何とキザで、小心なものなのだろうというところまで発展していく。極端な場合には、学者同士が激しく言い合うことにもなる。つまらぬことばの問題でまっ赤になって相手をけなし合うということはよく起こる。そのあげく、「日本語を使いたまえ」というような、表現上は平凡だが、相手を侮辱(ぶじょく)することばを投げつけたりする。

もっと頻繁に見られるのは、直観力と分析をめぐる対立であろう。一方は「分析してみないとわからない」と言う。他方は「分析するまでもなく明らかだ」と反論する。

初歩的なところにおいてこういうことが起こると、他の人びとはやる気をなくしてしまう。本当は思考も直観力もともに必要なのだが、大の大人が時々こんなに子どもっぽくなるものであることを念頭においておかなくてはならない。そして、自分の心のなかで時折つぶやいてみる必要がありそうだ。「ことによると、自分はいまいたって子どもっぽい態度をとっとはいないか」。

この場合の「子どもっぽい」ということばはネガティヴな（消極的・否定的）文脈で使われる。英語でいえば childish がこれに当たる。これに対して childlike という語もあって、これは「子どもらしい」（かわいらしい）という文脈で用いられる、肯定的な意味あいをもっている。いずれのことばでも、この二つの文脈はちゃんと使い分けられる。

「子どもっぽい」の方は、含意としてつぎのようなふくらみをもつ。「本来子どもでないはずなのに、この人は何という子どもっぽい態度をとる人か」というきめつける文脈。他方、「子どもらしい」の方は「想像される子どもという像にぴったりの態度だねえ」というのに近い。前者のまなざしは固く、後者は微笑みにつつまれ、やわらかである。

プラトンの『饗宴』はこんな世界に私たちを連れていく。

もう一歩先に

さて、同じような方向でもう一歩つっこんでみよう。『饗宴』に出てくるソクラテスの役割について考えてみようというのである。

それも、しかつめらしい哲学講義としてではなく、人間のことばに酔うという特殊な性質をちゃんと承知しながら、人間のおろかしさ加減のみでなくそのすばらしさ

をも承知して、双方の媒介者、通訳の役割を演じるソクラテスについてである。

ついでながら、ソクラテスという名前の意味は「健康な力」という意味である。何となく健康そうなイメージである。

ソクラテスは、とぼけてみせる。またからかう。そして、まつわりつき、追求の手をやめない。もちろん相手によりけりである。が、よく読むと、つぎのような性格の人物として方向づけられている。

つまり、他の人をきめつけるよりは、まず自分がことを始める人として。ねちねち、ぐずぐずしているのではなく大らかであるような人として。裁判官のように厳格ではなく、相手の弱さを考慮に容れて寛容である人として。個人的にではなく仲間といっしょに仕事をするような人として。そして既存の知識にしがみつくのではなく、専門知識はバック・ミュージックとして奏で、身軽に考えていくような人として、である。

要するに、ユーモアのセンスや精神的な身軽さをもち、自分たちの分野の外にいる人びととも協力して考えていくことのできる人としてである。

ソクラテスは知識をたくさんもっていた。しかし、それをどういう場合に用いるべきかを心得ていた。のみならず、自分の知識以外の、役に立ちそうなことは何でも活用する。自己顕示のためにとか、相手を煙にまくとか——そういうことはしなかった。タイミングの悪い発言もほとんどしなかった。

だから、ソクラテスのいるところ、「シンポ」が頓挫することはなかったし、相手との地位の違いを気にしたりはしなかった。難解なことばを使う相手に対しては、ソクラテスは笑いをもって近づき、相手の依拠している立場が常識というものであったり、単なる思い込みであったりすることを気づかせた。

ダイアローグ（対話）

遠い昔の話である。ギリシア時代をこまかく見ていけ

ば、まだまだ書くことは山ほどある。だが、それらをあれもこれもと書いても仕方がない。何をどのようにズームアップするか、そこが問題なのである。

対話のことをギリシア語で「ディアロゴス」という。英語の「ダイアローグ」はそれに由来する。この原意が面白い。それは「ロゴスを分けもつこと」というのである。この場合のロゴスは、ことば、論理、理性というようないろいろな意味を含んでいる。

古代ギリシアは奴隷制の社会である。だが自由民は広場に集まって実によくしゃべっている。あのおしゃべりは人類の歴史の上でも大変個性のある時代を形づくった。

今日の子どももそうであるが、ことばを話す以前の子どもはまわりの人びとと身体を媒介にして応答している。その応答のしかたは広い意味の「ダイアローグ」である。

日常私たちはいろいろな場面で人びとと対話する。単なるおしゃべりも楽しいが、筋のある対話も楽しい。そして、もっと面白いのは聴き上手になることである。ことばの意味を広げ、自然や社会のなかに隠れている「文法」のような構造にまで広げると、文化までが私たちにいろいろなことを語りはじめるのがわかる。これを大らかに考えてみよう。

子どもとは意外な面から意外なことをたずねるものである。

「コドモのことをなぜコドモっていうの」

考えようによってはギリシアの哲学者たちもこれと似た問いを提出し続けたのである。

「いったい、人間とは何だろう」「ぼく？　て誰？」「我々はどこから来て、どこへ行くのか」――。

しかも、背景から聞えてくるのは別の声であった。

「そんな問いには答えはないよ。ないことを承知しながら問わないではいられないのが人間なのかもしれないね」。

（名古屋大学）

牛飼童（うしかひわらは）

平安時代の宮廷人は、外出の折節、牛車を用いた。清少納言は、とりわけ牛車が好きであったらしく、牛車で野や原までも屢々巡り、スピード狂の趣きすら感じさせる。『枕草子』には、車の屋形に飛び込んでくる木の枝を急ぎ手折ろうとして、残念にも果たせなかったこと、蓬が輪に絡まって、輪が目の前を過ぎると爽やかな香りを運んでくれること、松の煙の香を放って、松明のあかりで暗闇を疾駆するおもしろさ、月の明るい夜、川の中を行くと牛が飛沫をあげ、それは水晶の砕け散る美しさであることなど、牛車に乗っての心ときめく話題が、数多く筆にとめられている。清少納言は、牛車の軽快なスピードによって浮き立ち、無邪気さが大きく揺り動かされたかのようである。

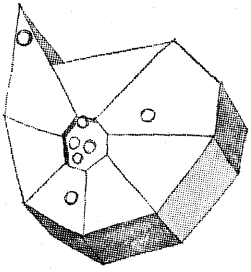
牛車の牛を扱い、先導役をつとめる者を「牛飼童」と呼ぶ。清少納言の乗った牛車にも徒歩の牛飼童がおり、牛の鼻輪をとっていた。清少納言は言う――「牛飼は、おほきにて、髪あararかなるが、顔あかみて、かどかどしげなる」と。髪の質までも注文するのは、縮毛なる己れへの凝視の裏返しであろうか。それは兎も角として、そこに描かれる牛飼の望ましい有様は、腕力と才気を合わせ持った屈強の男性である。しかし、牛飼は、頭髪を長く伸ばし、本来なら十五歳の元服で冠を着けるはずが、烏帽子もかむらず、童子姿の出で立ちをとる。牛飼は、少年とは限らないものの、姿は少年で「牛飼童」と呼ばれる習わしなのであった。りっぱな大人が、子どもの姿をする職種なのであった。

六畜を飼うことを牧すといい、牧畜社会では古来から、少年の労働力に多くを負うてきた。しかし、その故にもまして、牛車の牛は牡牛であり、かつ去勢牛だったと考えられるところから、牛飼童は牛と同型の「幼年成体（ネオテニー）」を徴づけられた「童子」を生きる職能と考えられたのではなかったろうか。（美）

☆養護学校の日々

開けゆく未来

津守　真



保育の一日と、積み重ねられる全体との関連

保育は、一日一日と充実させてゆく仕事である。一日の保育に意味がある。しかも、一日だけでは終らない。その一日が積み重ねられて全体となるときに、その一日の意味は、一層の確実さをもって明瞭になる。

新たな一日は、実践においても、解釈においても、不確実である。たとえ不確実でも、新たに発見される意味によって、全体の性格が変えられる。新たな一日は、まだ不確実な一日だから、思い切って新たな実践と解釈が可能になる。それによって過去の意味も変えられる。

新たな一日は、じきに過去になる。そして全体の中で意味を獲得し、確実さを増す。そのことは、保育者に安定感を加えるが、同時に、それが先入観となる危険もはらんでいる。新たな一日は、大人にも、子どもにも、前日とは違う一日だから、過去に獲得された解釈から解放されて、現在の現象を新たな目で見ることが要求される。

しかしながら、過去に積重ねられた日日の全体の中で形成された意味は、保育者の行為の根底に沈澱し、無意識の中で活動していると考えられる。新たな目で見るとは、ひとたび形成された意味を絶対化することなく、現

象の本質を問う試みに何度も立ち返ることである。

未来は、子どもにも大人にも、未知なものとして開かれている。実際は生活上の計画はあっても、それが現実となるときには、外的にも内的にも、新たなことが生じる。そのことが前提として、認識されないと、未来は閉されたものとなり、新たに生きる眺望を失ってしまう。そのことは、決して、未来はバラ色に楽観できるものだということではない。また、着実に成果を上げ得るものだということでもない。むしろ、新たに迎える保育の一日は、かわりばえのしない、困難な今日のつづきであるかもしれない。しかし、その中にあっても、子どもとの生活の中には、常に新たに発見される未知の現象があり、それの本質を問う試みは、われわれに対して新たに開かれている。

朝、こういうことを考えていても、保育の場に出ると、たちまち、具体的なできごとの中に投げこまれる。そうして、頭の中にあったことは数分後には忘れてしまう。思いがけない子どもたちの姿に出会い、その要求にこたえ、判断し、交わり親しみ、一日を終る。不思議なことに、それが素材となって、生きた全体像を形成するのである。

弁当のおぼんを持歩くこと

食事のとき、S夫は、自分の弁当を置いたおぼんを持って歩き、落ち着ける場所をさがすが、なかなかみつからない。何度も移動した後坐った食卓で、隣に坐っていた子どもが、偶然にコップをひっくりかえし、その水がS夫のおぼんにこぼれた。S夫は大声を出し、その子どもの髪を引張った。それからおぼんを持って、ホールの隅の滑り台の上に坐って食べはじめた。私の傍に坐って一緒にいた。食事が終ると、私と追いかけっこをしたがる。私に追いかけさせ、私を見て走る。ときどきつかまえてふざける。

この数週間、S夫は、弁当をおぼんの上において持歩き、食べる場所をさがす。大たいにおいて、高いところ

の狭い空間が多い。他の子どもから妨害されない、安全な場所をさがしている。この日は、めずらしく、皆の中で位置を定める。ところが、隣に坐った子どもの水が自分のおぼんにかかると、境界をこえて自分の領域が侵されたように感じるのであろう。その子どもの髪を引張る。S夫が他の子どもの髪を引張るのは、自分の境界が侵されたという被害意識が働いていると考えられる。

食べることは、外界の物の領域にとりいれ、獲得する行為である。そのときに、S夫は、自分の食べる分を、区切られた境界の中に確保する。自分の領域が侵される体験を過去に積んできたのではないかと推察する。私は、S夫が食べる間、S夫の傍にいて、他人である私はS夫の領域を侵す者ではなく、守る者であることを知ってもらいたいと思う。S夫も私を拒否せず、一緒にしゃべったり笑ったりする。

食事が終ると、S夫の方から、私に追いかけさせ、目を合わせ、つかまえられて笑ったりする。自分の領域に他人の手がのびてくることを、現実の緊張感の中ではなく、遊びの中で体験する。

大人から注目されることと小さい子どもを押し倒すこと

次の日の朝、S夫は登校するとすぐに、私に「おめでとう　しよう」と云う。以前に実習生と折紙をちぎり、まき散らして遊んだことがある。そのあそびのことを「おめでとう」と云う。裏庭の静かなところで、私は折紙を切り、S夫ははさみで半分刻みをいれてからちぎる。少したまると、おめでとうと云ってまきちらす。そのときに、パチパチと手を叩いてにぎやかにすることを要求する。そうすると、S夫も手を叩いてはしゃぐ。桜の花びらの散る下で、私と落着いて何度もくり返して手を叩いた。S夫と二人で交るいい時間だったと思う。

そのあと、体の小さいM夫が滑り台を下から上ってゆくところを、私が後から手をそえてやっていると、急にS夫が私の腋の下からもぐりこんで、M夫を押し倒し、髪をつかんで引張る。私が思わずその子をかばうと、一

層激しく髪を引張る。

いちばん小さいK男がひとりでボールをいじっている。私が近寄ると、K男は私に抱きついてくる。そして私をしゃがませ、馬のように四つ足で歩かせる。私はK男とホールを歩きまわっていると、S夫がきて、K男を押し倒し、髪をひっぱる。私は急いでK男をかばうが、S夫の方が早いので間に合わない。

こういうことが頻発するので、大人は、小さい子どもを守ることに追われてしまう。こんなとき、S夫にどのように話しても、また、どのようにとめても、じきに同じことをくり返す。S夫の側にもそうしなければいられない理由があるように思われ、それを無視して一方的に強い対応をするのは、よいことと思われない。しかし、現実には、小さく弱い子どもとの間に、たえず葛藤を起すので、S夫を無視したり拒否したりすることが多くなる。こうして、S夫と小さい子どもたちとの間で右往左往して一日が過ぎてしまう。

このようなことが相次いで起るのを体験すると、この子どもが大人に注目されるのを求めることと、小さい子どもの髪を引張ることとの間には関連があるように思える。この子どもは、見られることに敏感であると同時に、見ることにも敏感である。自分のしていることに注目してもらいたい気持が特に強い。また、大人がだれに注目しているのかを見ることに早い。この両者が相互に関連していることを、この子どもの行為はよく示している。

私が他の子どもと遊んでいると、す早く走ってくる。髪を引張るS夫が拒否的な眼を向けると、そのことをも敏感に察知する。そして、S夫にだけ手をかけるような遊び（大人が両手両足をもって揺らすあそびなど）を要求する。

この子どもは、大人から注目され、見られることにより、自分の存在感を確認している。過度と思えるほど、見られることによって存在を拒否された体験があるからだろう。自分のしていることを、大人に見てもらい、承認してもらいたいというのは、どの子どもにも共通のこ

とである。そのときに、承認と励ましの眼でそっと見られていないと感じるときに、子どもは、どこまでも承認の眼による注目を要求する。

見られるときに、自分の存在を拒否されたと感じるときには、他人を見るときに、その人が自分の存在を拒否するかどうかを、敏感な眼でうかがう。この子どもの場合、見ることが、自分自身の喪失感につながることが多い。大人が他人をかばって、自分を拒否することを察知したときには、その喪失感を埋めるために、具体的な物を獲得しようとする。つまり、小さい子どもの髪をつかむのである。それによって、大人の注目をも獲得することは、存在を強化することである。

見ること――得ること――在ること、見られること――失うこと――存在を拒否されることは、それぞれ相互に関連し合っている。いろいろの場合を考えてみると、そのことは確かめられる。この子どもの場合には、獲得しようとしているのは、単なる物ではない。もっと存在の根底にかかわる。大人から存在の価値を認められることである。

こう考えると、S夫が他人の髪を引張るときに、その行動を否定するあまり、S夫に不信の念を起させてはならないと思う。しかし、他方、小さい子どもの方は、かばってくれる大人を必要としている。私が小さい子どもをかばうと、S夫は一層激しくその子どもに向う。子ども同士に任せられる場面をつくれるとよいのだが、それがなかなかむつかしい。

中間に立つ保育者

二日後に、R夫が手にマイクを持っていたら、S夫が近寄って、それをとった。R夫はそれをほしがったが、S夫の方が強く、それを持って別の部屋にいった。私はどちらにも加担せず、他のことをしていた。しばらく後に、S夫のマイクは放り出されてあった。R夫がそれを拾って持っていた。

この日、小さい子どもとの間に葛藤があっても前日の体験から私は静観していたことが何度かあった。子ども

の間の葛藤の渦の中に巻きこまれないで、距離を保っていると、見えてくるものがある。子どもなりに、その状況を乗りこえようとしていることがわかるし、それぞれの子どもが、そうせずにいられない、自分自身の課題があるらしいことが、その場でほのかに理解できる。それに応じて、こちらの対処の仕方も違ってくるから、反射的に対応しないでよかったと思うことがしばしばある。

この日も、見ていると、髪の毛を引張られた方の子どもも、比較的早い時間に立ち直り、自分の遊びをつづけられるようになっている。また、私が立ち入らないと、S夫の方も、そんなにひどく向わない。いずれにしても加担せず、距離を保って見るというのは、決して、子どもとは次元の異なる場所に立って傍観することではない。いつでも、必要があれば子どもを助けられるようにして、緊張した関心を保ちつづける。そして、それぞれの子どもが、葛藤場面の困難をのりこえて、自己実現の活動に向うことができるように、間接的に、子どもに気づかれないところで、条件をととのえている。

普通の場合には、子ども同士の解決に委ねてすむことも多い。しかし、小さい者、力の弱い者が一方的に押し倒されたり、髪を引張られることが多いと、子ども同士に委ねることができるのは、ごく幸運な場面に限られる。どうしても保護せねばならないことも多い。それのみでなく、本来、子どもの仕事は、弱い者の側に立つ仕事であり、小さく弱い者が被害を受ける事態に当面すると、大人の側に、それは許せない感情がはたらく。しかし、そのあまり、もう一方の側の子どもの行動を、攻撃・暴力とのみ見て、その子どもにとってのその行為の意味を見ることができなくなったら、保育とは云えなくなる。そして、保育する者でありながら、保育者の目を失ってしまう。

この日は、私は中間に立つことが許されるほどに、だれもが調子が良かった。しかし、これだけでは事態は解決しない。S夫自身の精神的課題を見きわめ、その解決を助ける保育を必要としている。それは、保育の過程の中で、次第に明かにされてゆく。

（愛育養護学校）

図書紹介

『保育の見直し』

●一〇〇〇日の実践記録●

著者　大戸美也子
横浜学園附属
元町幼稚園

発行所　フレーベル館

小さいが、しっかりとした厚みの一冊である。出版される前から、元町幼稚園の五年間の保育実践過程が活字となって紹介されるということで、おそらく他にあまり類をみない価値のある一冊になろうと、心待ちにしていた。

本書は、行事中心の「定型化した保育」に疑問を抱きはじめた先生方が、「子ども主体の保育の実現」をめざして、五年の間、様々な勉強、模索、試練をのりこえていく過程を記録にまとめたものである。

本書の中で最も興味深い点は、まず何故このようなことができたのかということであろう。その答えは、著者が最後にまとめて、「園長の保育理解、主任の牽引力と共に、保育者の自己研鑽への情熱と保育者相互の連帯の強さの賜物」と書いておられる。これだけでは読者のサイドには、現実のこととして何かピンとこないが、本文をていねいに読んでいくと、その事が具体的にどういうことだったのか、自分なりに解釈してゆけると思う。

最も初期の段階で、先生方がこれまでの保育に疑問を抱きはじめていく過程は特に興味深い。問題が動きはじめる寸前までの様子は、「次第に行事の規模がふくらみ、保育者にも負担が感じられるようになってきました。しかし定型化した保育以外に思いをめぐらせることもなく、年中行事とわり切って、保育者の保育技術を洗練させて困難を切りぬけていったのです。」（点線は筆者）と紹介されている。この辺がいかにもまじめで律義な日本人的特性とにが笑いせずにはいられない。そして、こうした伝統的努力型保育者をいかに周囲に多くみるかにつ

いても、あらためて気づかされるのである。この一節を読み筆者は「何とかやれてしまうことの怖さ」を再認識した次第である。

その後、元町幼稚園には、「何とかやれない」新卒の若い教師が入り、「……これでいいのかしら」という疑問に発し、後は、玉突きの玉が次々に当ってはね返るように、経験豊かな保育者、主任、園長そして、研究会へと求める道が広がってゆくのである。こうした過程は、一読すると羨しい限りでもあるが、当の先生方は、まさに暗中、一光を求めてはいのぼる心境であったと察する。特に感激するのは、現職研（お茶の水女子大学幼児教育現職研究）にご参加の先生方が、非常に熱心に暖かく援助していらっしゃることである。こうしたことも含め、横浜という地理的、文化的状況も何らかの役割を果していたのではないかと推察する。

子どもの様々な活動の記録や生活展、運動会の紹介は、研究のつっこみの深さを教えてくれて貴重な資料である。不思議なことは、改革前の教育目標と改革後の指導目標が一見それ程変わっていないことだが、このことはつくづく目標は確かな現実に裏づけられてこそ有意義なものとなることを教えてくれる。

最後に、元町幼稚園はさらに「子ども本位の保育を洗練させていく」ことを課題としているということであるが、筆者には、一般論として、親や小学校のやりとりが大変に考えさせられる点として残った。有数の（分ってくれる）小学校の先生や親だけを相手に幼児教育の本質を語っていたのでは、少々消極的すぎるのではないかという気がしてきた。我々も、もっと小学校から先へ育つ子どもを遠くみつめ、先方からとの学問的、実証的連続研究を交え、社会に説得してゆく力を持たなければと痛感させられた。

とにかく、考える保育者であったら、手元にひとつ欲しい一冊である。手にとっていつ響くかは、それぞれ異なるかも知れないが……。

（常磐学園短期大学　江波諄子）

ブリューゲルの「子供の遊戯」（最終回）

――西洋美術史にみられる〝子供の遊戯〟小史――

森　洋子

十七世紀――プロテスタントの思想家たち

十七世紀のプロテスタントの思想家、とくにカルヴァン派の人びとは、前々回や前回で述べたルネサンスの教育者のように、子供の遊戯を積極的に意義づけ、重要視するのではなく、逆に懐疑的ないし否定的に解していた。彼らは労働は神への奉仕であるがゆえに、労働しないことは怠惰であり、悪の徴と考えた。例えばイギリスのカイウス・カレッジの教師ウィリアム・デルは「子供たちを安逸と怠惰の中で躾けるほどの大きな悪はないであろう」[注1]と強調する。同じくジェームズ・ジェーンウェイは『子供のための証し』（一六七一年）でこう述べている。

「汝らはどう時を過すのであろうか。悪い子供たちと遊びかつ怠惰のうちに過すのか。汝らはあえて主日（日曜日）に走り回ろうとするのか。あるいは聖書をしっかり読み続けるのか。」[注2]

十七世紀オランダ——子供の遊戯を寓意化する詩人たち

同時代のオランダの詩人や道徳思想家は、以上述べたようなプロテスタントの思想家の遊戯論、すなわち子供の遊びを罪悪とまでみなさないまでも、そうした行為を人生の虚しさ、名声や富に対する人間の虚栄心、真理への盲目視、日常にみられる愚かな行為の寓意として謳ったり、論じようとした。こうした寓意化の世界について、筆者はすでに本連載のいくつかの遊戯、例えば「シャボン玉」「鞭独楽」「棒馬」「輪回し」でも説明した。確かにヤコブ・カッツやルーマー・フィッシャーなどの寓意詩の中では、子供の遊戯も一見、時禱書の月暦頁の余白彩飾(本連載第十三回)やブリューゲルの「子供の遊戯」の延長線上にあるようだが、図像的には全く別の視点から解釈されているのである。

カッツの遊戯寓意論がもっとも如実に伝えられているのは、一六二五年の『結婚について。婚姻という状態のすべての事情』[注3]の序詩「子供の遊戯」であろう。「オランダの道徳の父」と親しまれているカッツのこの書は、女性の六つの時代、娘、恋人、花嫁、既婚婦人、母、未亡人時代について各章を設け、結婚という状態、その営為の教訓を述べてある。その第一章「娘時代」の導入としてアドリアーン・ヴァン・ド・ヴェンネ下絵、ヤン・ヴァン・ヴェルスラーレン彫版の一頁大の「子供の遊戯」の挿画が掲げられていた。続いて三七二行にわたる「子供の遊戯」の詩が続く。本連載ではすでにド・ヴェンネの版画を部分的に掲載したことがあるが、今ここに全体図を概観してみよう。上方のラテン語とオランダ語の銘文のある吹流しの中には、「子供の遊戯、遊びから真面目へ」EX NVGIS Kinder-spel SERIA と書かれてある。全体の構図(図1)は明らかにブリューゲルの「子供の遊戯」に啓発されている。十七世紀の代表的な挿絵画家ヴァン・ド・ヴェンネは、オランダの都市ハーグのクネーテルデイクの街並みと街路樹を遠近法で画き、ブリューゲルとは違った意味で地誌的な都市景観図のへ興味を示した。まず中央手前の子供の楽隊を先頭に、剣を手にした二・三十人

図1　「子供の遊戯，遊びから真面目へ」（アドリアーン・ヴァン・ド・ヴェンネ下絵，J．カッツ『結婚について』1625年）

の子供軍隊の行進がみられる。子供たちは左側では人形遊び、シャボン玉、独楽回し、風船（豚の膀胱を活用）、小鳥遊び、風車（かざぐるま）、輪回し、逆立ち、凧上げ、騎士ごっこなどに熱中している。右側では兎跳び、縄跳び、竹馬、棒馬、指骨遊び、合奏ごっこなどが興じられている。構図構成をみると、ブリューゲルが九十種類もの個々の遊戯を画面全体に等価的に点

図2　「主は人間の子供を見守り給う」（アドリアーン・ヴァン・ド・ヴェンネ下絵，J．カッツ『寓意と愛の図像集』1622年）銅版画

在させたのに対し、ヴァン・ド・ヴェンネは二十数種の遊戯を前・中景に集中させている。そして遠景は都市景観の表現に力を入れている。ところでヴァン・ド・ヴェンネはこの版画以前の一六一八年、同じくカッツの『寓意と愛の図像集』に子供の遊戯の挿画を制作した(図2)。彼はミッデルブルクのアプデイ広場をモデルに、そこで遊ぶ五、六〇人の子供の、約二〇種類の遊戯を画いている。版画の下にはオランダ語とフランス語で「ネーデルラントの楽しげな子供の遊び」、スペイン語で「フランドルの子供の情景」と記されている。

構図はよりブリューゲルに近い手法で、個々の営みを画面前手に点在させている。街路樹は一六二五年の版画に比べると、まだ遠近法をさほど意識して画かれていないが、逆に遠景に都会や市庁舎を画き、十七世紀オランダ画家らしい都市景観への強い関心を示している。

これら二点のヴァン・ド・ヴェンネの「広場で遊ぶ子供」の版画は、いずれも『寓意図像集』の挿画であり、図1に付せられた三七二行の詩には、とくに著者の寓意的意図がよく明示されている。本稿では個々の遊戯について、すでに部分的に紹介したので、書出しの四六行を訳出してみた。

「かつて子供の遊戯をみたものは誰でも
既婚男子、若者、既婚婦人、娘であろうと
この絵が君に気に入るかどうかまずみてごらん。
それから少し落着いて
何を云わんとしているかみてごらん。
私が君を見ると君は笑っている。これは子供のことに過ぎないとさあ、笑ってごらん。勝手にどうぞ
大口をあけて笑ってかまわない。子供の大騒ぎは
すべて見かけの喜びだ。すべて愚かな追跡にすぎない
どんな人間も嘲笑してもよい
しかしこの絵の中に君自身が
子供たちと一緒に遊んでいるのだということを
君もこれから考えてほしいと私は望むのだ。
子供っぽく人形をもたないひと
かつて時々馬鹿なことをしないひと
かつて時々転んだりしないひと
時々お手玉（骨遊び）をしないひと
何かを始め、つまずかないひと
そういうひとがいないなんて
私は全く知らない。この遊びは意味がないように思えるが
この中に小さな世界が入っている。
世界とそのすべての複合体は
たんなる子供の遊びにすぎない
だから君は愚かな若者たちがなすことすべてを
その望みについて理解するならば
どんな風に全世界が動いているかを
君は道路で見るはずである。
君は君自身の愚かさと子供の遊戯を発見すると
私は思うのだ。あるいは今日君が見出さないなら
君は全く盲目なのだ。君の目には光がないのだ
だから君の目のために眼鏡を探しなさい。自己認識という眼鏡を。自分の心の中をみる眼鏡を。
そしてもし君がひとたび眼鏡を正しく使い

目を決して閉じないならば
君は自分の愚かさやあるいは自分の罪を見出すことを
私は知っているのだ。あるいはもし私が間違っていたなら
私は人間を知らないのだと考えなさい。しかし一緒にやって来
なさい。女も男も。そしてここで一度試みてごらんなさい。[注4]」

カッツの主張を要約してみると、世界とその営みはすべて子供の遊戯にすぎない。子供が大騒ぎをし、夢中になっている遊びも見かけの喜びなのだ。大人たちは彼らの行動をみて自分自身の愚かさを認識しなさい。もし認識できなければ、それは心の目が盲目だからだ。だから自己認識という眼鏡を求めなければならない、となろう。カッツばかりでなく以下に述べる当時の主導的な道徳思想家の影響によって、オランダ風俗画では子供の遊戯に、様々な寓意性、教訓性を盛り込もうとしたのである。

図3　「すべての地上の物財は人形道具だ」（ヨハネ・ド・ブリュンネ『寓意図像集』1636年）

例えば、ド・ブリュンネは一六三六年に出版した『寓意図像集』*Emblemata of Zinnewerk* の中で、「すべて地上の物財は人形道具だ」（図3）というタイトルで、こう述べている。

「ひとがこの地上でみるものすべては
人形道具以外の何ものでもない
そこで見出すものと一緒に遊ぶ
子供のように
ひとはわずかの時しか楽しまない。
というのはそれを簡単に投げ出すからだ
ひとが知るように
人間は二度だけでなく
いつも子供なのだ。[注5]」

画面をみると、子供椅子に坐った女の子が、人形遊びにあきてしまったのか、人形やままごと道具を床に放り

出している。しかし著者の真意は、すべて地上の物財は人形道具、すなわち子供の遊びにすぎず、価値のないものと、説得することにあったのであろう。

ここでもうひとり「人形遊び」を謳っている詩人ヤン・ロイケンを紹介しよう。ロイケンは元来、生計のために腐蝕銅版画家として活躍し、寓意図像集、聖書、および自著の銅版画の挿画を制作した。その後彼は詩人を志し、ドイツの神秘思想家ヤコブ・ベーメの影響をうけた詩集を出版する。彼の寓意図像集の『人間の営為の鑑。手職、技芸、活動、職業の百点の図版、詩行つき』（一六九四年）は江戸時代に日本にももたらされ、実学者たちから注目されたが、とくに司馬江漢は珍しい西洋の職業、例えば、樽作り、錫細工師、籠作り、船乗り、泥炭採取人、皮なめし屋などを模写している。

図4　ヤン・ロイケン「人形」（ロイケン『人間の初め・中間・終り』1742年）銅版画

ところでロイケンの晩年の著作『人間の初め、中間、終り』は江戸時代ほとんど知られてなかったが、教育論的側面からひじょうに興味深い内容であった。同書の中で彼は風車、棒馬、風船、人形、おはじき、輪回し、ビー玉、縄とび、骨投げ遊び、独楽回し、鞭独楽回しなどの子供の遊びを論じながら、大人たちに日常行為への自省をうながしている。それは各頁に旧、新約聖書の引用を列挙して対比させていることからも、その教訓的意図は明白である。

「人形」（図4）

大人の世界で、木や石で出来た人形の崇拝は、
子供の人形遊びと全く共通している。
子供に与えられた小さな人形は
無邪気な手に抱かれている。
大人たちの実際の生活のように
ひとは子供っぽい考えと笑うだろう
しかし、そこに多く見出すものは

図5　「縁日での玩具売り」（J，カッツ『新旧時代の鑑』1632年）銅版画

大人が人形で遊んでいることなのだ。[注6]

ヤコブ・カッツの『古き時代、新しき時代の鑑』に、市場で母親が幼い娘にせがまれて人形を買う銅版画の挿画（図5）があるが、おそらくこの時代には、既製の人形が容易に町で求めることができたのであろう。これをみると並んでいる人形たちの衣装は、子供の着ている衣服よりは母親のそれに全く類似し、子供がいかに人形で大人の世界の模倣ごっこを好んだかを想像できる。そのほかにスタンドには棒馬、太鼓、弓矢が売られ、流通経済の繁栄した十七世紀オランダの社会を反映している。

つぎにロイケンの『縄とび』を読んでみよう。この詩も人形と同じく、縄とびを比喩的に謳いながら、あえて危険な人生を歩もうとする大人に警鐘を発しているのである。

「縄とび」（図6）

子供は縄とびをして走る
安全に行くことができるのに
多くの人びとは自分の道を危険なものにする。

図6　ヤン・ロイケン「縄とび」（図4参照）

三章「遊戯する子供、生と死を想起させるもの」の中で、当時の種々の子供の遊戯を、(1)ウァニタス、(2)正しい道の選択、(3)さ迷う、の三つの寓意に分類した。ヴァニタスを表わす典型的遊戯はシャボン玉、風船、独楽回し、指骨遊びである。(2)の「正しい道の選択」には以下にのべるコルヴェン遊び、ほかにビー玉あて、輪回しが属する。(3)の「さ迷う」は棒馬と風車、歩行器、以下にのべる凧上げなどである。本稿ではコルヴェンと凧上げに注目したいが、こうした分類はきわめて独創的な解釈といえよう。デュランティーニの寓意的解釈の典拠となったのは、筆者も本稿で指摘したが、一六一四年から四二年にかけて出版ブームとなった寓意図像集であった。デュランティーニの挙げた子供の遊戯の絵およびその情景のある風俗画のどれも、カッツ、フィッシャー、ヘインシーイス、ド・ブュンネ、カロム、ヴァン・デル・ヴェーン、ロイケンなど

縄とびをして走る少年は
自ら危険にも転倒するようなことをする。
しかし自らかつての理性を売るものは
子供の遊びのような馬鹿げたことをし
自らの回りのすべてをぐらぐらさせ
危険にも一本足でそうしている。[注7]

一九八三年に出版されたメアリ・フランセス・デュランティーニ著『十七世紀オランダ絵画における子供』[注8]での

の寓意図像集の説明と一致するとは思えないが、著者が十七世紀オランダの典型的な遊戯として注目したものを、ここに改めて列挙してみよう。シャボン玉、鞭独楽、指骨遊び、コルヴェン、輪回し、風車、棒馬（ときには手に風車をもち、馬上の騎士の槍合戦ごっこをする）、凧上げ、トランプゲーム、小鳥飛ばし、鳥籠、鳥の巣、おおむ、ねずみ取りなどの捕獲遊び、犬と遊ぶ・猫ダンスなどの愛玩動物の訓練遊び、太鼓・笛・ロンメルポットなど楽器遊びである。これらの中でシャンボン玉、鞭独楽、指骨遊び、輪回し、風車、棒馬などは、すでにカッツなどのオランダ寓意図像集の紹介もふくめ、本連載の中でブリューゲルの遊戯と関連させつつ述べたので、ここではとくに注目すべきコルヴェン、小鳥飛ばしや鳥籠、凧あげなどについて触れてみたい。

コルヴェン遊び——自己の目標設定

オランダ語コルヴェン kolven（コルフ kolfの複数、ゴルフの前身）の本来の意味は、打球棒を意味する英語の〝クラブ〟club にあたるが、草原や氷の上でコルフでボールを転がして遊ぶ球戯の総称でもある。

この球戯の起源はかなり古く、少なくとも十五世紀後半のフランスの写本で『ブルゴーニュ公妃の時禱書』の二月と十一月の月暦頁の余白にこの遊戯がみられる。青年たちは先端がシャベルのようなクラブで、ハンドボール位の大きさのボールを転がし合っている（本誌一九八四年八月号図5参照）。さらに十六世紀後半に彩飾されたフランドルの『時禱書』の十一月の上部余白彩飾（図7）でも五人の子供たちがコルヴェンに夢中になっている。とくに右端の男の子はクラブを構え、まさに打球しようとし、ひとりは両手をあげて応援し、他の三人は彼らの番を待っている。

図7　ホルトゥルス・アニマエの画家「11月，コルヴェン遊び」1510～20年ミュンヘン州立図書館図 cod. lat. 2836

図8　アーヴェル・カンプ「氷滑り」ドレスデン国立絵画館

図9　アドリアーン・ヴァン・ド・ヴェルデ「ハールレム近くの氷上でのコルヴェン遊び」1668年　油彩　ロンドンナショナル・ギャラリー

図10　「コルヴェン遊び」オランダの木版画　18世紀（図26の部分）

図11　「コルヴェン遊び」オランダのタイル画　17世紀中期

十七・八世紀のオランダは子供や大人、貴族や庶民もこぞってコルヴェンに興じたといわれる。居酒屋の近くにコースを作り、客たちは酒を飲みながらコルヴェンのプレーや見物を楽しんだ。しかし一般には長方形の公園で二つのポールを立ててプレーが行なわれた。冬になると人びとは氷の上でもコルヴェンを楽しんだが、それは十七世紀の冬景色を画いた絵（図8、図9）、版画（図10）、タイル画（図11）に必ずといってよいほどコルヴェンが画かれていることから知られる。幼い子供たちは室内でも球転がしを楽しんだらしいことは、ヤン・ステーンやピーテル・ド・ホーホなどの絵から窺い知れる。ド・ホーホ「リンネル棚」（図12）では一家の主婦と思われる婦人が若い召使女からきちんと折り畳んだリンネル布を受取り大きな洋服ダンスに仕舞おうとしている。他方、扉近くで子供がコルヴェン遊びをしている。デュランティーニによると、オランダでは沢山のリンネルを所有していることは、富裕の誇りであるという。そのため、ヤン・ロイケンの寓意図像集『家政の教訓』（一七一一年）[注9]の「戸棚」の項には、リンネルを仕舞う

図12　ピーテル・ド・ホーホ　「リンネル棚」
1663年　油彩　アムステルダム国立美術館

図13　ロイケン「コルヴェン遊び」(図4参照)

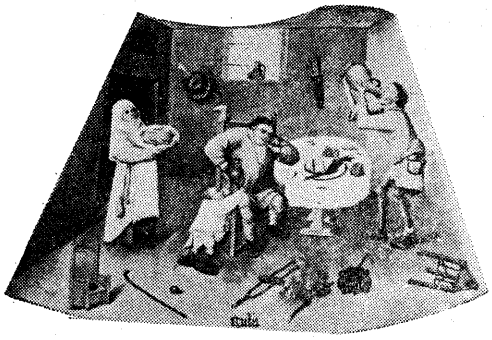


図14　ヒエロニムス・ボス　「大食」（「七つの罪源」の部分）1475～85年頃　油彩

図15　ピーテル・ド・ホーホ「コルヴェン遊び」1658～60年頃　ナショナル・トラスト・ポレズデン・ラチェイ

人生の一片をうまく打つ者はもっとも大きなゲームを得る。ボールが（子供の楽しみに従って）ここからあちらの目標に転がるように知恵もまたその心をボールのように打つ。そのように道具は地上の財からこちらの方へと天国のゴールにむかって打ち込まれる。[注10]」

行為は、「不潔の、染のついた宝」すなわち、無益な虚栄への執着を寓意すると記されている。さらにロイケンは先述の『人間の初め、中間、終り』の中で、コルヴェンを地上の関心から離れ、天国の的にむかってゴールすべき自己の目標設定とも説いている。

「コルヴェン遊び」（図13）

こうしてみると、コルヴェン遊びは、一時的な繁栄を意味する「シャボン玉」や、何ら有益でない仕事につねに労苦を注ぐに譬えられた「輪回し」などのように、警鐘を意味する寓意ではなく、適度な力と契機によって自分の望みを正しい方向に集中させる、という励行的な寓意として描かれている。[注11] ゆえにド・ホーホの室内画はコルヴェン遊びのもつ積極的、教訓的な意味を、物質的な財に拘泥する家庭婦人の吝嗇的性質に対比させている。

しかしコルヴェンは必ずしもいつも肯定的な意味をもつとは限らなかった。十五世紀後半から十六世紀初期に活躍したオランダの画家ヒエロニムス・ボスの卓子画「七つの罪源」にコルヴェン用のクラブとボールが画かれていた。それは七つの罪源のひとつ「大食」（図14）の情景で、床の上に子供椅子（おまる）や焼ソーゼ、シチューなどと一緒に、クラブとボールが放り出されている。つまり肥満体の親子の怠惰と大食の象徴として画かれていたのである。ゆえにデュランティーニは同じくド・ホーホが「コルヴェン遊び」（図15）を画いたとき、コルヴェンの有する正しい人生の道と快楽的性質との両方があるのではないか、と解した。すなわち画面では、部屋に入ろうとする女の子も外に立つ少年も共にコルヴェンのクラブを手にしている。しかし女の子のそれはオランダの諺「彼の手に適わしい小さなコルフ（クラブ）」、すなわち、彼にぴったりだ、彼はそれを好んでする、阿呆は自分のクラブを好むなどを意味している。それに対して外でボールを打つ少年の行為こそ、人生の正しい道を教訓的に示しているのである。

図16　ニクラース・マース「凧上げ」油彩　アルデナム卿コレクション

凧上げ——虚無の風

つぎにこれまでに触れたことのない「凧上げ」について注目してみよう。この遊戯は季節ときわめて繋りが深い。ことに風の多い早春や晩秋になると、子供たちは凧を作り、野原で思う存分、凧上げを楽しむ。ニクラース・マースの「凧上げ」（図16）をみると、菖蒲の花が咲き、トンボが舞う頃、少年が嬉々として凧を上げ、その側で二人の仲間がそれを見上げている。左端の男の子は

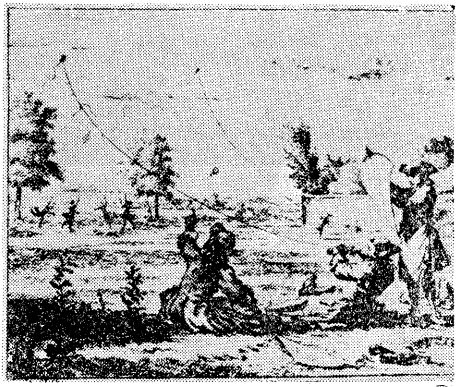


図17　ヴィンセント・ヴァン・デル・ヴィンネ「凧上げ」（A. スピンニカー『実りなき労働』1714年）銅版画

大きな凧を手にしながら、観者をみつめている。一見、楽しそうな風俗画である。しかしアドリアーン・スピンニカーの『教訓寓意図像集』（一七一四年）では凧上げを「実りのない労働」（図17）という題のもとに、人生の空しい、無益な活動を謳っていた。さらにロイケンも「凧上げ」をどんなに一生懸命上げても風のいたずらで紙も破れ、糸も切れる「虚栄の行為」に比喩していた。

「凧の紐をしっかりもちなさい
さもないと貴方は自ら不必要なトラブルを招くことになる。
空中の凧が
子供の欲望を楽しませるように。
そのようにあらゆる人間の小智は
あらゆる虚栄の風に乗る凧をつかまえる。
一生懸命に熱中すると
紙のように千切れて飛んでいく」[注12]

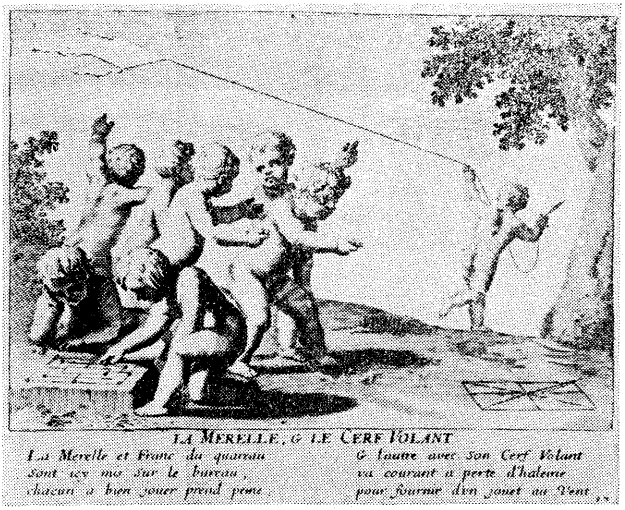


図18　クローディン・ブゾネ「凧上げ」（J. ステラ『子供の遊戯と楽しみ』1657年）銅版画

凧上げを見たり、自分で上げた者は経験するが、大変な努力とエネルギーを費し、調子よく凧を空高く上げることができても、一寸した風のいたずらで紐が切れ、凧が干切れて、地上に落下し破損することがある。つまり凧上げは限界知らずの人間の欲望を表わし、時間とエネルギーを無駄に浪費する人間の愚行の寓意なのである。

十七世紀のフランスの詩人ジャック・ステラは『子供の遊戯と楽しみ』(一六五七年)の中で、「モリス遊びと凧上げ」(図18)と題してこう謳っている。ただし画面の凧は、これまでのオランダのそれよりも一層単純で、菱形に三本の紙テープをつなげただけのものである。ほかに数人の子供たちが「四角のどこかに入れよ」(右下)とモリス遊び(左下)に興じている。

「モリス遊びと凧上げ」

図19　ピーテル・パウル・ルーベンス「小鳥と遊ぶ少年」油彩　1624/25年頃　ベルリン国立絵画館

モリス遊びと〝四角のどこかに入れよ〟はここの下にある。

誰しも勝つことに一生懸命気をつかう
他の子供は凧をもっている
息せき切って走っている
風の玩具となるために[注13]」

こうしてみると、このステラの詩には全く寓意的意図

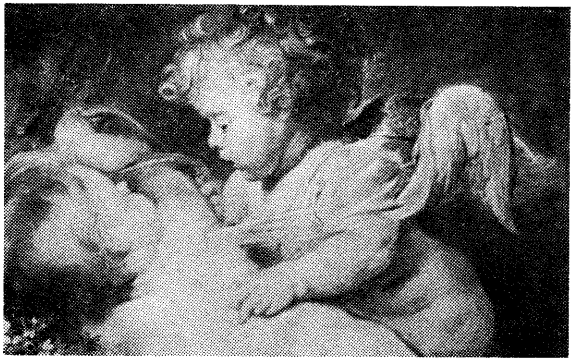


図20　ルーベンス「天使」(花輪の中の聖母子」の部分)　油彩画　ミュンヘン　アルテ・ピナコテーク

がなく、戸外で遊ぶ子供の姿がのびやかに描写されている。

小鳥遊びと鳥籠

少年が小鳥の脚に長い紐をつけ、空中を飛ばして楽しむ遊びは、十六世紀のフランドルの時禱書の上部余白彩飾の「9月」に、そしてブリューゲルの「子供の遊戯」の№11にも画かれているが、十七世紀になると独立したタブローの主題として愛好されるようになる。こうして

図21　ルーベンス「二人の兄弟」(部分)油彩
リヒテンシュタイン侯家コレクション

フランドル絵画の巨匠ルーベンスもこのテーマを二度画いている。そのひとつはベルリンの国立絵画館所蔵の「小鳥と遊ぶ少年」(一六二四～二五年)(図19)の小品で、画面いっぱいに画かれた二、三歳の横顔の男の子が左手で紐を括り、右手で小鳥を脅かして飛ばせようとしている。近年の年輪年代学の調査によると、ルーベンスは元来、「花輪の中の聖母子」(図20、ミュンヘン、アルテ・ピナコテーク)の天使の頭部(一部右端)の習作だったものを、後にもう少し板をつけ足し、そこに手と小

図22　カレル・スタバールト「少年と小鳥」
油彩

鳥を画き、今日のベルリンの作品として完成させた、と判明した。[注14] こうして天使の頭部の習作が、図像的にも寓意画として大きく変化する。M・ヴァルンケの研究によると、ルーベンスの尊敬していた人文主義者ユストゥス・リプシウスの手紙が小鳥の意味を説明するという。リプシウスは友人が子供を失って悲嘆にくれているとき、つぎのギリシャの墓碑文を引用し、友人を慰めた。すなわち「人生はその手に小鳥をもつ子供に譬えられる。多くの場合、小鳥はそこから素早く飛んでいってしまう。」[注15]

図23　ドミニクス・ヴァン・トル「愛玩鳥」油彩画

またネーデルラントには、「鳥のように、人生は素早く飛び去っていく」という諺もあった。

なお、この絵のモデルについて、一九七八年のベルリンのカタログでは、ルーベンスの一六一四年生まれの長男アルベルトと推定されていたが、同年のヤン・ケルヒのルーベンス展のカタログでは、一六一一年生まれの甥ムンデル・フィリップと修正されていた。

ルーベンスのもう一点の小鳥遊びの絵、それは愛妻イザベラが他界した一六二六年、残された幼い二人の息

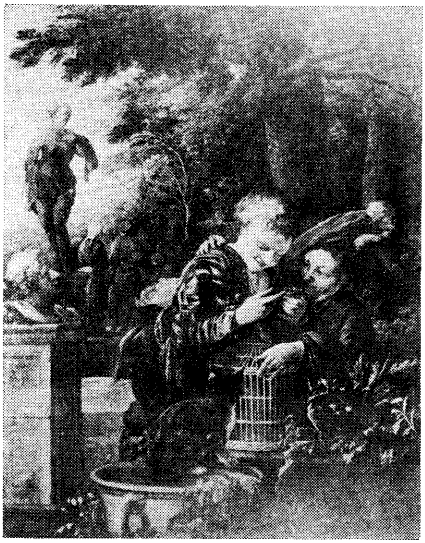


図24　エフロン・ヘンドリッキ・ヴァン・デル・ネール「二人の少年と鳥籠」油彩

子、すなわち十二歳の長男のアルベルトと八歳の次男ニコラウスを画いた家族図（図21）の中の情景である。早熟で聡明なアルベルトはルーベンスの自慢の息子だったが、彼は右手に本をかかえながら、悲しみをこらえているかのような弟を左手でかばうようにして立っている。遊び盛りのニコラウスは右手に鈴のついた玩具、左手にひわの脚にしばった紐をもち、小鳥を飛ばしている。ちょうど母親が他界した時でもあったので、「鳥のように、人生は素早く飛び去っていく」という寓意は、この絵の状況にふさわしいのではなかろうか。

同じく鳥をもっていても、カレル・スタバールトの「少年と小鳥」（図22）には、ルーベンスの絵とは全く異なった寓意がこめられている。半円形アーチの窓の下に、着飾った少年が右手に小鳥を乗せ、左手で壺を支えているが、そのロから草の茎が飛び出している。明らかにこの壺は小鳥の巣作り用に準備されたものである。すでに古くからネーデルラントの農家では鳥の巣作り用として、軒下にこうした壺がかけられてあった。

この少年が観者に何か語りかけるようにしていることから、また小鳥と壺の組合わせから、この絵は十七世紀オランダ絵画によく使われる性的寓意とも解される。オランダ語で鳥 vogel を動詞化した vogelen は十六、七世紀のオランダ語のテキストでも多く、「交接する」を意味していた。ここでは小鳥が男性、壺が女性を隠喩していることになろう。しかしこうした解釈は、ひとつの可能性であり、画家自身がそれだけを強調したかったのではなく、鳥と巣作りの壺を手にして得意満面な少年の姿を絵画的に表出することも、もちろんその創作上の動機であったのである。

ドミニクス・ヴァン・トルの「愛玩鳥」（図23）にはスタバールトと共通したモティーフがいくらかある。同じく半円形アーチの窓の下で、二人の姉弟が鳥籠の鳥を眺め、やはり少年が壺を支えている。しかしスタバールトの絵よりこの主題を明確に説明しているのは、窓の下の「天上と地上の愛の葛藤」を表わした浮彫である。ヴァン・トルはローマのヴィルラ・ドーリア・パンフリに

あるフランソワ・デュケノワの大石理浮彫のコピーを模したが、この主題によって愛の寓意性はより分りやすくなる。すなわち、籠の鳥は愛の捕囚また時には処女性の象徴ともなる。少年は小鳥を壺の巣の中に誘い入れようとしている。一般にいわれることだが、小鳥のために巣が別に用意されているときのみ、鳥籠は開けてもよい。というのは危険は軽卒者を襲うからである。籠から飛び出した小鳥には危険がいっぱい待ち構えている。つまり娘はすぐに欺かれるかもしれない。未来の「巣作り」の相手が用意されているときこそ、始めて籠からはばたいてもよい。ダニエル・ヘインシーイスが『愛の寓意図像集』(一六一五年)で警鐘しているように、「見つけることは失うこと」"Reperie, perire est"なのである。[注16]

さらに鳥と鳥籠が「愛の寓意」を意味しているより明確な作例として、エフロン・ヘンドリッキ・ヴァン・デル・ネールの「二人の少年と鳥籠」(図24)をみてみよう。森の一角にはヴィーナスの彫像があり、二人の婦人がその側を横切っている。これは明らかに愛の世界の舞台装置なのである。とくにこの絵には上述の二点と違って、猫が少年の手中の小鳥を狙って身構えている情景が加えられている。鳥籠の中の鳥が自らの不自由さを憂う恋人の状態であることは、先述のヘインシーイスの著作の中でも「私が自らを縛ったがために」Perch' io stesso mi strinsi と謳われていることからも知られる。[注17] しかしこの絵の鳥も籠が出され、自由になった途端、猫の襲撃の危険に晒されている。それはあたかもペトラルカのソネットがその状況を語っているかのようである。「もし私が捕えられゝば、苦境に陥る。もし私が自由になれば、死に行くことになる。」つまりここでは、大空をはばたかこうとする娘に、鳥籠を離れ処女性を失う(「見つけることは失うこと」)危険を警告しているのである。

タイル画にみられる子供の遊戯

これまでにも筆者はタイル画に表わされた多くの遊戯を紹介してきた。これらを知る契機となったのは、一九七九年「国際児童年」を記念して、オスロー、ハンブル

ク、コペンハーゲン、レウウァルデン（オランダ）などの美術館で巡回された「タイル画にみる子供の遊戯」というきわめて異色な展覧会だった。この企画の学術的アドヴァイザーは、オランダ東部の寒村ムッセルカナールで高等工業小学校の教師をしているヤン・プライス氏（図25）である。彼は長年かかって、十七、八世紀の子供の遊びを表わしたタイルや、その絵画的源泉となった木、銅版画、さらに古い玩具や遊具などを収集し、研究した。この展覧会も実は同時期に上梓されたプライス氏の著作（『タイル画にみられる子供の遊戯』）に基づき構成された。本誌の連載でも同書を度々引用し、写真も転載させていただいたので、筆者は一九八三年の夏、お礼と報告がてら著者をお訪ねした。そしてプライス氏とタイル画上の子供の遊戯について二日間にわたって意見を交換し、数々の情報をご教示いただいた。プライス氏はこれまでこのテーマのタイル画に関し、ほとんど研究書が刊行されていないこと、そればかりでなく専門家がタイル画をイコノグラフィー的にあまり調査していないこと、さらに「子供の遊戯」についてはカッツ、フィッシャー、ロイケンのような寓意的な意味がこめられていないのではないかと語っていた。

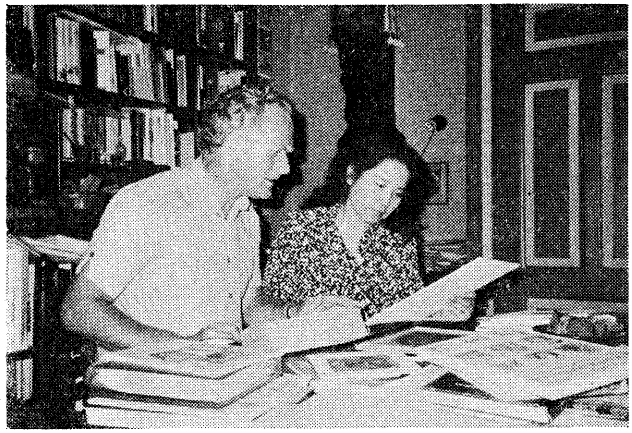


図25　ヤン・プライス氏を訪れた筆者　1983年8月　ムッセル・カナールにて

そしてこのことを著書の中でも「シャボン玉吹き」を例にして、こう述べている。「もちろんシャボン玉を吹く子供を表わしたタイル画のイメージがいつも副次的な意味を含蓄しているとは限らない。たとえ『寓意図像

集』に依拠していることはあっても、普通はそのまま子供の遊びとして意図されてもよいのである。[注18]」確かに十七世紀中期頃から十八世紀前半まで、流行の波にのって数十種類もの遊びがシリーズ（他にも船舶、職業、花鳥などのシリーズがある）として量産された。そしてその絵画的源泉を知る上で、ひじょうに貴重な資料は一七六〇年頃に発行された木版画（図26 K.O.G prent）[注19]である。これは48種類の遊びをセットにしたもので、個々の遊びに相応する十七世紀後半のタイルも現在保存されている。しかしタイル画が実際に下絵として利用したのは、図26よりもっと早い時期の手本でなければならないので、すでに一六四〇～五〇年頃にはこの木版画の範例となるシリーズが存在したにちがいない。また、アムステルダムのH・ヴァン・ムンスター・エン・ゾーン（一八一一～一八二五年）の十二点木版シリーズがいくつかのタイル画のモデルとなったが、実はこの木版画自体、ヤン・ロイケンの『人間の初め、中間、終り』の八エッチングの図柄を踏襲している。しかしこの場合、プライス氏の指摘するようにタイル画それ自体には寓意的な意味が意図されなかったにちがいない。

因みに当時は、スポンス Spons というミシン目のような穴のあった型紙を素焼きのタイルの上に置き、木炭の粉の入った布袋で軽くその型紙の上をたたいて、図柄をタイルに写したのである。その後、その粉の点線に従って筆で図案をトレース・彩色して焼いたのである。こうして出来上ったタイルのほとんどはブルーの図柄で統一され、しかもその様式年代は、四隅の模様によって、例えば、百合は一六二五～五〇年、牡の頭部は一六二五～七五年、小蜘蛛は一六二五～一九二五年頃までというように、判定できる。なお子供の遊戯を画いたタイル画は今日でもデルフトの専門店などで求められる。

以上、本稿では十七世紀オランダの子供の遊戯の寓意性に主眼を置いたが、と同時に看過してはならないことは、図8のアーヴェル・カンプの「冬景色」やヤコブ・カッツの『結婚について』の銅版画挿画などにみられる子供の世界が、実は十七世紀オランダの経済的繁栄を物語

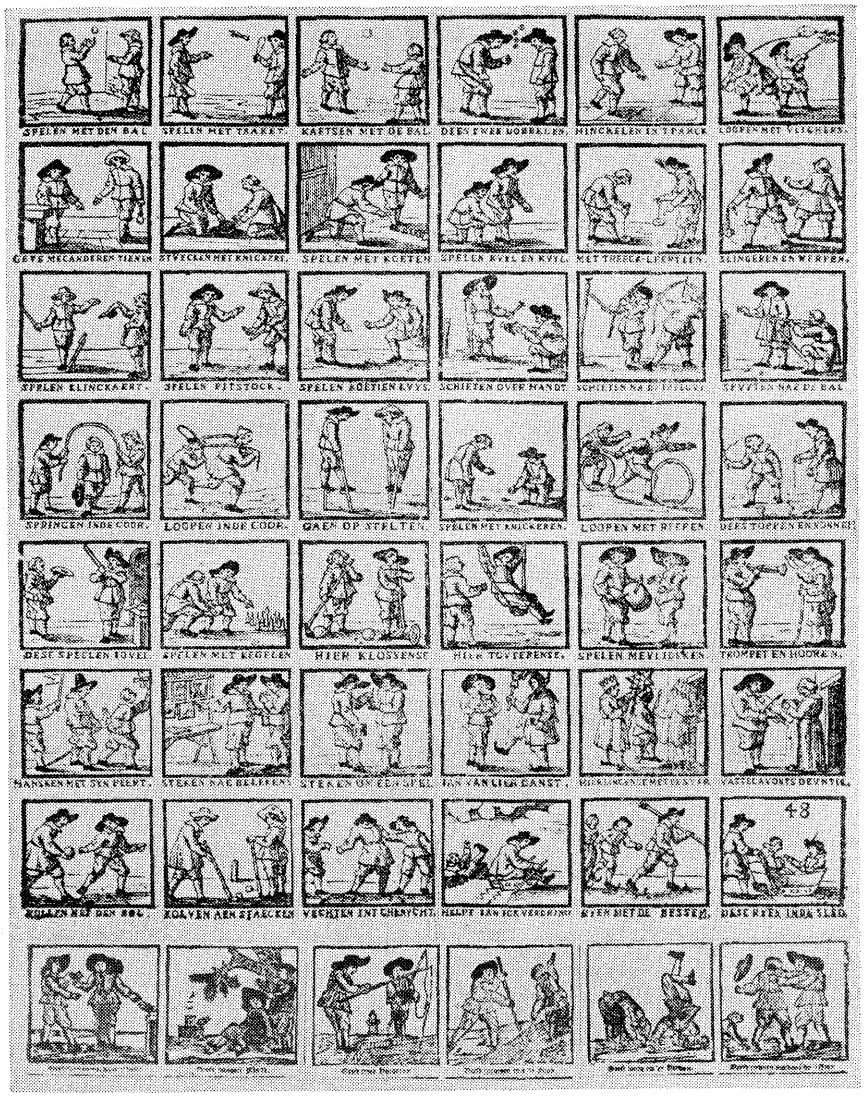


図26　「48種類の子供の遊戯」オランダの木版画　1780年頃

っている、という点である。とくに都市の子供たちは社会階級の上・下にかかわりなく服装もよく、縁日などで親に買ってもらった既製の玩具を手にし、スケート靴や橇を整えてもらい、のびのびと広場で遊んでいた。それに対して、同時代のドイツでは三十年戦争で全土において耐乏生活を強いられ、子供たちが四季を通じ広場で遊ぶことは難しかったと考えられる。ゆえに、今後子供の遊戯の世界には社会学的考察も加わったらもっと奥行きのある一論となろう。

連載を終えて

約四年間にわたる連載もようやく今回で完結することができた。この間一年間の中断があり、読者の皆さまや編集部の方々にご迷惑をおかけいたしたことを誌上にてお詫び申し上げたい。

最初編集部からブリューゲルの「子供の遊戯」について一論を書いてみないかと薦められたとき、この絵に画かれた遊びは九十数種もあるから、数回はかかると思った。しかし回を重ねるごとに、単にブリューゲルの画いた遊びの分析だけでは不十分と感じ始め、同じ遊びが中世の文学でどう謳われ、中世期からルネサンスの写本、油彩画、版画などでもどう表現されたか、さらにどのように十七世紀のオランダでは遊びがもはや子供の世界のものとしてではなく、大人の日常行為や思考に対する道徳教訓として謳われてきたのか、という風に視野を広げざるを得なくなった。その間お茶の水女子大学の本田和子教授が近著『異文化としての子ども』(紀伊国屋書店)ほかなどで拙論を紹介され、日本の子供の遊びとの比較分析を行なわれたので、ますますこの研究のもつ役割を認識した。

一九八三年と八四年の夏に、子供の遊戯に関する文献や写真資料収集のために渡欧した。この機会にヨーロッパで出会った専門家との議論や、入手したいくつかの文献から、ブリューゲルの遊戯の分析が終った後、この作品を歴史的に位置づけるためにも、子供の遊戯を美術史の立場からまとめてみたいと思いはじめた。こうして着

手した最後三回にわたる「西洋美術史にみられる〝子供の遊戯〟小史」も、もっと遊戯思想史、児童教育史の立場からも考察されねばならないにもかかわらず、試論の域を出なかった。また全体を通じ、日本にも類似した遊びや遊具もあり、時には共通した精神風土から生まれたもの、また反対に西洋独得、いやフランドルにしか存在しない民俗的なものもあり、比較文化史の分野から論じたら、さらに幅広い研究に発展できたかもしれない。それらを今後の児童教育の専門家たちの研究成果に期待いたしたいと思う。最後に、三年間を通じ、遅筆な私を叱咤激励し続けた編集部の皆川美恵子さんに心からのお礼を申し述べたい。

注1　Dennis Brailford, *Sport and Society*, 1969 p. 140.

注2　Mary Frances Durantini, *The Child in Seventeenth Century Dutch Painting*, Michigan 1983, p. 187.

注3　J. Cats, *Houwelyck; Dat is de gantsche ghelegentheyt des echten staets*. Middelburg 1625.

注4　訳文は雑誌 *is* 一九八三年二二号の拙論「中世の子供の遊戯」から転載した。

注5　Durantini, *op. cit.*, pp. 190–191.

注6　Jan Luiken, *Des menschen begin, midden en einde; vertoonende het kinderlijk bedrijf en aanwas*. Amsterdam 1712, p. 51

注7　*Ibid.*, p. 69

注8　Durantini, *op. cit.*, pp. 177～296.

注9　Luiken, *Leerzaam Huisraad*, No. 22, Amsterdam 1711.

注10　Luiken, *Des menschen begin*, ……, p. 87

注11　Jacob Calom, *Minne-Picht*, 1626, V. „Werckt, maar merckt" による。

注12　Luiken, *op. cit.* No. 75.

注13　Jacques Stella, *Les jeux et plaisirs de l'enfance*, Paris 1657, No. 17.

注14　美術史にとっての年輪年代学とは、絵が画かれた板の木口の年輪幅を測定し、年輪幅変動の標準カーヴとの相関性を調べて、その板が製材されたもとの樹の伐採年度を推

定する方法である。「小鳥と遊ぶ少年」に関して、ハンブルク大学木材研究所のJ・ベウフ、D・ヨックシュタイン博士らによって行なわれた。

注15　Martin Warnke, *Flämische Malerei des 17. Jahrhunderts* (Bilderhefte der Staatlichen Museen Berlin, Stiftung Preußischer Kulturbesitz, Heft 1), Berlin 1967, p. 9.

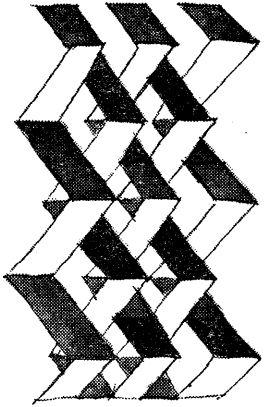
注16　Herzog Anton Urlich-Museum Braunschweig, *Die Sprache der Bilder*, 1978, p. 159.

注17　*Ibid.*, p. 117.

注18　Jan Pluis, *Kinderspelen op tegels*, Assen 1979, p. 25.

注19　KOG-prent とはこの版画の現在の所蔵機関 Koninklijk Oudheidkundig Genootschap ter Amstedam の略である。

（明治大学）



あけまして
おめでとうございます
今年もよろしく
お願い申し上げます。

暦年号が〝一九八五〟と代り、本誌も〝八四巻〟と齢を重ねた。一月おくれながら、新春のご挨拶を申し上げておきたい。世紀末の警鐘が乱打される中で、保育現場の動きは、子どもの園ならではの健かさでくり広げられてほしいと、切望することしきりである。

改めてふり返る瞳に、本誌八四年の歩みは、その時々の幼児教育界とのかかわりの様相を反映して、幾つかの異なったありようで把えられる。たとえば、ひたすら啓蒙に意を尽くし、先導的試行の器であった前半期、それに対して、右顧左眄をくり返す斯界に対して、決然と一つのかたちを守り通し、不退転の意志を顕在化させ続けた後半期……。この両態が、本誌八四年の歴史を貫流する動的な思想であったと言えよう。

そして、いま、本誌は、幼児教育界とひたすらに向き合う、従来の関係から微妙に身をずらし、いわゆる〝現場〟なるものから、ある種の距離を取り始めている。〝現場ばなれ〟という密やかな呟きは、誰よりも編集子自身がくり返し口にして、その意味を確かめ直しているものの一つなのだ。すなわち、幼児教育に関する本質的な必要に応えようとするなら、いま、本誌を、〝幼稚園・保育所〟という制度的な囲いの外に、解き放つべきなのではないか。というより、〝幼児、そして彼らをめぐる保育の営みそのもの〟を、より広い地平に解き放し、人と文化にかかわる基本的な問いとして問い直して見るべきではないのか。今年もまた、より拡散するであろう記事内容を慮りつつ、所感の一端を表明しておきたい。

(H)

幼児の教育　第八十四巻　第二号
二月号　©　定価三〇〇円

昭和六十年一月二十五日　印刷
昭和六十年二月一日　発行

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人　本田和子

東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九―一九六四〇番

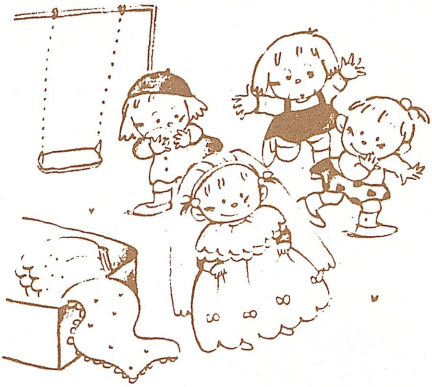
⊙本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら，おとりかえいたします。

イラスト保育実技シリーズ①

幼児のための発表会その準備と進め方

舘　紅・著



子どもの小さな遊びから、劇遊びへと展開させるコツがよく分かる。

本書は、子どもと「発表会」に取り組む先生のために、発表会の基本的な考え方、出演種目の決め方、脚本の選び方、スケジュールの立て方、保育者同士の協力のしかたを詳説してあります。
☆著者脚色の脚本を９編紹介。

Ａ５判・216頁・定価1,500円

保育イラストブック

絵／江川厚子・奥谷ます子・冬野いちこ・ふじたひでみ　フレーベル館 編

**園だよりのアシスタント！
楽しいイラストがどのページにも！**

- ルーズリーフ式で原稿作りがスピーディにできます。
- やさしい線画で、色ぬりもできます。
- オリジナルイラストのヒントにもなります。

Ａ５判・104頁・ルーズリーフ式・定価1,600円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

フレーベル館の8大月刊誌

新企画がつぎつぎと登場します。

1—情操
キンダーブック
年中児向けの生活絵本です。季節感と創造力をたいせつに「心のやさしさ」を育てていきます。
(4月号 特別ふろく付) 団体購読価 月250円

キンダー おはなしえほん
年長児向けの本格的なお話絵本です。豊かな創造力と美しい心を育てます。
(上製本) 団体購読価 月300円

2—観察
キンダーブック
年長児向けの生活絵本です。観察力と遊びの心をポイントに、子どもたちの好奇心を高めます。
(4月号 特別ふろく付) 団体購読価 月250円

がくしゅうおおぞら
遊びながら楽しみながら、考える楽しさ、知る面白さが知らず知らずのうちに育っていく絵本です。
(母親向け別冊付) 団体購読価 月300円

しぜん—キンダーブック3
身近な昆虫や動植物など、自然界の不思議を正確で美しい絵や写真で感動的に紹介する科学絵本です。
(上製本) 団体購読価 月300円

ころころえほん
園生活で初めてふれる、年少児のための明るい絵本。幼ない子とのスキンシップが楽しめます。
(厚紙製本) 団体購読価 月250円

大判になり、増頁!!
キンダーメルヘン
年少・年中児向けのお話絵本で、幼児らしい夢を育てる楽しい絵本です。
団体購読価 月250円

保育専科・指導計画と指導の実際
4月号から本誌と指導計画との2本立て。保育資料豊富。定価据置き。別冊は年3回発行です。
定価400円 (別冊とも年間7,800円)

<わしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業課(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館